

し置かれまするやう、義のためこゝに三平は、父に先立ち冥途へまゐります。随分と御長命をあそばし、安樂にお過し下さいまし、モハヤ今生でのお暇乞でござりまするぞ」と云ふのも口の中、絞り出すやうなみだは、肺肝を突ツき出し、湯のやうにハラクと滾れて来る……。

節「時刻遅れては詮なきこと、モシ見咎められしその時は、何と言ひわけいたすべき冥途に在す御主君よ、御父上よ太夫ごの、ハヤ三平は怨を呑み、こゝに生害いたすぞよ、さらばくも口の中……。

地「ギラリと抜いた脇差を、逆手に取つて左の、脇腹擦り氣を静め、ウーンと突き貫し聲を呑み、『ツ、ムウ、ン』ギリ／＼と右の方へ引き廻し、見事に一文字に掻き切つて、ズラリと抜くとタラ／＼と、血汐は瀧のやうに流れ出で、時ならぬ唐紅、秋の紅葉を散らせしごとく、抜いた刃を咽喉笛へ、宛てがつてウ、ンと俯伏に、打ち伏して了ふ……。

節「衰れやこゝに三平は、忠孝兩道に迫められて、二十三歳を一期とし、夜半の嵐に

散り亡せし、義理を立てぬく武士道の、鑑籠と今に萱野郷 香煙絶えせぬ碑は、よろづ代かけて日の本の、大和魂の權化ぞと、賞めぬものごとなかりけり……。

地「父の七郎左衛門は、斯んな三平に苦しい事情のあらうとは、夢にも知らない。来る朝、いつまで経過しても三平が起きて来ないから、七郎「國や、お國「ハイ、七郎「三平は何處かへ行つたかな、お國「イエ、何處へもお出ましになりませぬ、まだお寢みでござります、七郎「夫れは妙じや、何日も早起する三平、今朝にかぎつてこの遅いこと、一寸起して来て呉れ、お國「ハイッ」と起つて三平の部屋、襖開けると這は如何に、ブーンと鼻を撞く血腥さい風……オヤとお國が駈け込めば……。

節「這は抑も如何に這は如何に、可愛の良夫いとをしの、三平さんは三十に、なるやならず死なしやんす……。

地「これは七ツ目の文句、お國は一目見るより、お國「キャ……ッ、タツ大變でござりまする、タツ誰か来て……。」と金切聲、聲聞き付けて七郎左衛門、駈け込んで見ると三平は、見事に腹を掻き切つての最期、七郎「オツ、コツこれは三平、ナツ何ゆゑ

のこの最期、仔細ぞあらん、國、慌てるな お國「ハイ、三平さんは何故御生害をあこばしました 七郎「仔細ぞあらん、ソレツと四邊を探すと二通の遺書、一通は「父上さま」また一通には「大石内藏助様」とある、七郎左衛門封押し切つて讀み下すと、

「去年亡君御馳走の義に付吉良殿へ如何様の御鬱憤被成御座候哉被及刃傷候處同席の御方に御押留被成不被御本意御生害の節無御殘念可被成御座候段我等式迄難忍仕合に奉存候故去年赤穂被召上候節より同志申合候義有之時節を考へ此度罷下候に付暇乞をも不仕罷下候ては後日の思召も恐多不孝の沙汰に及可申處心外の義に存御暇乞參上仕候得ば達而御留被成候段御尤の思召は難有奉存候得共神文にて申合せたる儀兎角難申上御心逆申事思食に隨候得共忠義忘申に似たり忠義立可申と存候得共思召に違ひ不孝の罪猶可被重候依之自殺仕候一通殘置候間於山科大石内藏助様へ早々御届可被下候且又此度申合候衆尋ね來り可申候右之衆中へも申置度候得共事急に候間無其義候宜御傳可被下候以上

正月十四日

萱野三平

父上様

七郎「オツ、これは三平、知らなんだ、斯ほどの健氣な心なら、何故さうと一言云つては呉れぬ、拙者も武士じや、喜んで暇を遣はさうもの……ア、親ゆへ何氣な倅に犬死させた、ア、三平、許して呉れよ、濟まんかった、親はづかしい、許して呉れよ……」

節「一生のわかれ父親は、よしなきことに倅をば、大死させたる口惜しさに、許して呉れよの一言に、亡き三平の屍に取り付き、男泣きにて泣き伏せし、心の内は如何ばかり、血を吐く思いなくくも、

地「なみだを拂つてお國には因果を含めて里へ歸し、倅の遺書携へて、京都は山科へ駈け上り、倅の殉死を太夫に知らず、内藏助愁歎の一條となる……」

◎大石瀨左衛門傳

東軍流御前仕合の段

(上)

まくら「大石瀨左衛門信清は、盟主内藏助とは、姻戚の間柄、義士の内でも腕にかけ

その名を知られた勇士の一人、同じ傳記のその内で、兄弟義士に加はらんと、争はれしことなれば、中に立つたる内藏助、亡君の墓前に御圖を取り、東の下向を決定される……今その一段をお聞きに入れる……

節「忠臣は、常に孝子の門よりと、古昔人の口吟み、赤穂の四十と七人は、いづれ劣りのあるものぞ、別きてもこゝに説き出す、大石瀨左衛門信清が、殿の御前の晴れ勝負、東軍流とて武道のきはみ、腕みがる、魂は、實に頼みある武士の、龜鑑とこそは知られたり……」

地「赤穂五萬三千石の藩中で、東軍流の武術を極めしは、太夫大石内藏助、同じく瀨左衛門信清、潮田又之丞の三人、いづれ劣らぬ優れた腕前、中にも瀨左衛門信清は、師、備前の奥村權左衛門重信の高弟で、モハヤ免許皆傳となつて居る、されば家中でも名うての腕利、この瀨左衛門の右に出づるものなきは、その勇名を唱はれ居る節「治に居て亂を忘れざる、武士の心得武術の道、淺野の家は代々に、山鹿甚五左衛門から、教へを受けた家柄に、武術は殊更ら嚴めしく、家中を誠しめはげまされる……」

地「頃は元祿十年の春は正月十五日、淺野の家の武具はじめ、名だたる武士の晴の勝負、御前に雄雌の決を取る、下は足輕から、上は家老に至るまで、腕を忘れぬ武具はじめ、腕によりかけ立會ふ矢聲、勇ましななど云ふばかりなし、さて當日の勝負追々と進み、ハヤ有數の瀨左衛門信清の順番とぞなる、相手は誰ぞ、これも東軍流を學ぶ潮田又之丞高教なり、身支度いたして道場へ出でる……正面には主君内匠頭長矩公傍には太夫内藏助良雄をはじめ、多くの武士が、綺羅星のごとく、威儀を正してひかへたり、この勝負こそ當日の見もの、見のがしてはなるまじと、家中は残らず、猫も杓子も首突き出して見物する實にも榮ある大事の勝負……」

節「身支度なした兩人は、ズーツと放れて立ち向ひ、手頃の本太刀取るよりも、早くもサツと身を退り、又之丞は中正眼、瀨左衛門は大上段にと振り冠り、ジーツと詰め寄せて来る……」

地「腕においては双方とも、同じく免許皆傳の達者、エイヤツと掛けるはげしき矢聲ジーツと詰め寄るありさまは、實にや龍虎の争ひも斯くやと思ふばかり、主君をはじ

め一家中、さてこの勝負どうなると、片唾を呑んで見物する……。

節「このとき潮田又之丞、何處に隙を求めたか、エイヤツオーツと迅雷の鳴りはためくがごとくにて、エツとばかりに打ち込んだり。シヤアもの／＼しやと瀬左衛門、サツと外して真向から、微塵になれよと打ち下す。此方も去るもの引ッ外し、木太刀のものを掻いくいり、横に拂つた一刀は、アワヤ瀬左が胸腹へ、ドーンと這入ると思いきや、彼の時早くこの時おそく、カチーンと受け止め刎ね返し、隙さす小手を打ち込むを、サシツタリと又之丞、これもカチーンと受け止めて、左右にサツと引き別かれところがへしに瀬左衛門、真正眼にと附け替へる、又之丞は大上段、エイ、ヤツ、オウ……ツと掛ける聲、城にひびきて物凄し……。

地「ナツ、ボン／＼、ポボンボン／＼竹屋の火事のやうに、双方叫び合つたが、その打ち合ふことの早さ、目にも止らんばかり、見物はウンともスンとも云はない、みな肩で息をして居る、中にも太夫内藏助、東軍流を家中に入れ、彌が上にも武術をほげみ、國の静めに仕たいと云ふつもり、されば兩人の勝負には一入力を入れられて」

内藏「ヤア／＼兩人とも、打ち込めツ、決して怯れを取るべからず、隙あらば打ち込め、晴の勝負ぞ、いづれも負けるな」夫れでは勝負が附かない、一家中は片唾を呑んで見入つて居る、この時又之丞エイツと云ふと、ズバリ真正面から打ち込んで来る奴を、カチーンと受けた瀬左衛門、ポボンボン／＼と刎ね返し、更に勝負が附かない、スルト太守長矩侯が長矩「アア／＼兩人とも、天晴なる腕前、この勝負は余が預るぞと仰しやつたら鶴の一聲、兩人はサツと左右に別れ、平伏する 兩人「ハ、ツ、未熟なる腕前、まことにお耻かしき次第にござりまする」見物は一時に、仕たりや／＼、ウワ／＼と賞める、兩人は大きに面目を施して、御酒を頂く、そこで内藏助は、改めて主君に向ひ 内藏「御前、申すまでもなく、治に居て亂を忘れざるには、武藝を勵むことにござります、當藩は山鹿流の軍學を受け居りますが、未だ武藝に秀でしものなく、まことに残念に心得ます、つきましては、以來東軍流をもつて藩武藝の表看板といたしたく、この義御聞き濟のほどを願いまする」

主君「ウム、道理のことである、汝が宜きに計るが宜からう 内藏「ハツ、早速の御聞

きすみ、有りがたうぞんじまする、つきましてはまづ當分の内は、大石瀨左衛門、潮田又之丞兩人を師藩役といたしたいと心得まする

主君「ウム、内藏「彼れ兩人は、ソレでも奥村權左衛門より、免許皆傳のことにござりますれば、追つては權左衛門を迎へ取るごいたし、取、あへず彼等兩人を師藩役と

いたしたいと心得まする 主君「ウム、夫れよろしからん、彼等兩人、腕において優り劣りのなきのみか、心ばるも相同じく、忠義に厚き武士であるから、平素の行狀にも

現れ、家中を善きに訓導くには、まことに相應しきことである、ア、コリヤ、兩人

兩人「ハッ 主君「今日より汝達兩人は、師藩役を命ずることであるによつて、家中の者に教授いたし呉れるやう…… 兩人「ハ、ハッ、這はまことに恐れ入ります、なか

く持ちまして、拙者ごときが、一藩の師藩などは、及びも附かぬこととございませ、平に御辞退申し上げます…… 主君「イヤその謙遜はまことに床しく思ふ、武

士は何事にも夫れであらねばならぬ、しかし今や當範において、汝達に立て付くものはない、よつて改めて、師藩役を命ずることであるから、左様に心得まするやう……

兩人「ハ、ハッ、まことに恐れ入ります、この上は及ばずながら、身を紛に碎き、御

家のために勵みまする…… 主君「ウム、随分と心得て呉れるやう、やア、儕輩、

身分の高卑を問はず、今日より瀨左衛門、又之丞を師と仰ぎ、劍道を磨くやう、キツト申し渡すことである」と仰せ渡されるればこゝに兩人は、

節「主君の御眼識、内藏助の、勸誘によつて名譽ある、劍道師範の役を受け、その身の任の重きをも、忠の一字にはげまされ、五百にあまる一家中、その子弟をば手を取

つて、教授いたされ内藏之助が初めの志東軍流を、範に傳へて行くは、權左衛門をも呼び迎へ、ともに家中をはげまして、今にも事變あるその時に、もの、役に立

てべしと、ふかき慮りも後になり、その勤功の現はれて、天晴れ赤穂の諸勇士は、みな一様に東軍流名だゝる腕と云はれしは、ひとへに良雄が計ひと、瀨左又之の薰陶の

よきを得たとは討入の、その夜に至りて現れたり、節「十年に亘つて兵を養ふは、たつた一日の奉公の勤めさせんためとかや、ふかき良

雄の計いと、兩人が腕は一家中、みな一様に行きわたり、ひとへに兩人の賜と、賞

めぬものとしてなかりけり……。

地「夫れから年を経ること四年、頃は元祿十四年、三月の十四日、江戸は千代田の松のお廊下において、主人内匠頭長矩侯は、怨み重なる吉良上野介をたんだ一打と斬り付けたまいしが、手許狂いてかすり傷を負はされしのみ、殿中は俄かの騒動、主人内匠頭長矩は、即日田村家において、切腹仰せ付けられ、國郡沒收される、降つてわいたる騒動に、浅野の邸宅はごつた返す、さてもこれから大石瀨左衛門信清が、義兄清四郎と復仇の、件を争の忠義のかきみ、そのあらましを、次第に委しく申し上げる

(下)

節「御若年なる長矩は、江戸の家老の不注意から、強慾無慈悲の上野へ、贈賄をも送らすに、遂には御家を滅亡して了ふ、まことや忠臣は得難きものと、今更らながらうなづかれる……。

地「江戸の家老安井、藤井の不行届から、上野介の怒りを買ふ、もどく上野介と云

ふ奴は、金のために左にも右にも行くべき奴、殊に毎年御勅使御來城について、莫大の金を儲ける、これは高家の筆頭として、禮義作法能く辨へ居るによつて、お上においても饗應役に對して、吉良の指揮を受くべく申しわたされる、吉良はこの饗應役からウンと賄賂を取る、饗應役は之れがために、貧乏させられる、相役の伊達家には、よき家來があつたので、甘く吉良に取り入つたから、無事に濟んだが、濟まぬは浅野家……。

節「欲の叶はぬ上野は、満座の中で長矩に、一度が二度三度四度、忍び難き耻辱を與へる、腹に据えかね内匠頭は、家をも身をも打ち捨て、脇差抜いて斬り付ける……。地「これがために長矩は、田村邸において、即日の内に切腹となる、早水藤左衛門、萱野三平の早打、ついで原惣右衛門、片岡源吾右衛門の注進、第三第四と、注進は注進と、江戸の變事が分つて来る……。赤穂の城では俄かの騒動、諸士は忠と不忠とを云はず日々出でる御評定、その内城受取の上使は来る、内藏助の遠謀、無事に城を渡して赤穂を立ち退く、一家中は散々ばらく、この時において、内藏之助前に、血

判いたして復仇の伴をいたすと誓いしものは、五十と七人、みなく思いくに赤穂を立ち退く、

節「さて大石瀬左衛門信清は、兄清四郎とともく、同士の内に加はらんと、まづ母人の前へと出で、」

地「両手を支へて清四郎 清四「母上さま、降つて沸いたる御家の大事、御母上にも、

さぞお驚きでございませう 母「イヤ妾は決して驚きはせぬ、妾よりはお前達兄弟、主

君の御高恩は忘れはいたすまいのう 清四「ハイ、宜く心得て居ります 母「心得て居れ

ば、今御家の危急に對して、何といたす、おめく城を渡せしほどの腰ぬけども、よ

も主君の御鬱憤を晴さうとする健氣な心はあるまいのう』すると瀬左衛門は、

瀬左「母上、私共は決して卑怯者ではござりませぬ、城を枕にとは思いましたが、こ

れは却つて然るべからずと思はれますので……………」

母「ソレは憶病から左様思ふのじやらう、父祖の代から御奉公の赤穂城、おめく明

けわたすとは何たる腰ぬけ……………」 瀬左「イヤこれは母上さま、お言葉を返し恐れ入り

まするが、我々はお上に對して御怨は少しもござりませぬので……………」御城は即ちお上

よりお受け取にまゐられますので、一旦の怒りに任せ、城を枕にいたしましたは、コ

レお上に弓を引き、勝てる見込のないのみか、賊名の下に仆れねばなりません、こゝ

をもつて怨むは上野介一人なりと、さてこそ無念を耐へて明けわたしたのでございま

す 母「何の彼のと、夫れは言ひわけがなあらう、ソンならお前達は何とするのじや

瀬左「仰せまでもござりませぬ、これより江戸へ下りまして、吉良の邸へ推参いたし

上野介の首級を申し受け、主君の御怨をお晴させ申すのでござりまする。

母「ウム、夫れが真なら我子ながら見上げた根性、キツと仕遂せよ、決して母ありと

思ふな、母はモハヤ世になきものと諦めて、思ふ存分働いて、故主の怨みを晴させ申

せ 瀬左「ハッ、母上から左様仰せ下さいまするは、身に百万の味方を得しより、心丈

夫にござりまする……………」 母「ウム、母も汝達が本望遂ぐるまでは、對面いたさぬぞ、

キツと怯れを取るなよ』と、

節「この母親にしてこの子あり、なご勇まらずに居らるべき、兩人はイキリ立つて膝進

ませたが、思ひ返せば母上の、お年召されたその上に、頼みと思ふ兄弟が、死すると聞かば如何ばかり、歎かせたまふがいたはしや、如何に氣丈に在られても、そこは母親の御心に、思ひ詰つて病氣の、出はせまいかと危まれ、口に言はねど心では、互に熱きなみだをこぼす……。

地「清四郎は母に、清四「母上さま、しばしが間、御不自由でも有られませうが、御辛抱を下さいまして……」母「イヤ／＼その斟酌に及ばぬこと、なまじ手許に居らるゝと、却つてこの身の苦しき増すのみ、一時も早く立ち越えて、主君の怨みを晴させて呉れ、夫れが母への第一の孝心である」

兩人「ハツ、その御心底を承はりまする上は、モハヤ猶豫なりませぬ、この上は一時も早く馳せ下ることにござりまする……」

節「必ず母ありと思ふべからず、宜いか 兩人「ハ、ツ、有りがたうぞんじます……」と、一禮なして立ち出でる……。

節「目指すは京都山科の、太夫の閑居へ一またげ、兩人は打ち連れ乗り込んだり……」

地「兩人は内藏助の前へ出で、兩人「太夫どの、承はれば、モハヤ近々江戸御下向のよし、かねて誓約はこゝでござります、兩者御同道を願します……」聞いた内藏助兩人に向ひ、内藏「仰せのごとく、モハヤ近々下向のことに極め申したが、しかし同士の内にいたして、兄弟のものは、いづれか一人残し置くことに相成り居る、よつて其許も、いづれか京都に残るやうにいたされたい、これは御身のみでなく、みな左様云ふ定めに相成つて居る、よつて御身達も一人は残り、家を継ぎ、母を見送らるゝやうにだされたい、孝を捨て、忠に赴くは、一應は理なきにあらぬも、忠臣は必らず孝子の門より出づと申す、よつて一人は残つて家を繼がれよ」と、理義を説く、兩人は案外と云ふ顔付、而かも理まへだから理屈は云へない」

清四「イヤ御道理の仰せでござります、然らば瀬左衛門、御身残つて家を継げい」

瀬左「這は以つての外でござります、這度のこと、拙者は疾くより貴悟いたせしことござれば、兄上こそお残り下され、また兄が家を繼ぐのは、これは當然のことではござる、樂四「イヤ／＼左様でない、是非に其方が残らねば相成らぬぞ」

瀬左「開は何故でございます 清四「されば、其方よりこの清四郎の方が、御奉公もふかく、且御思も多く……」と皆まで聞かず 瀬左「這は異なことを承はります、御家の大事に際し、勤めの厚薄、御恩の如何を云ふことのありませうか、拙者は君臣の義を守り、復仇にお伴いたす、たとひ何と仰せあるとも、拙者はお伴申します、御兄上こそお残りあそばし、老母を御養育の上、家をお継ぎあれい、既に原惣右衛門殿も弟惣三郎を残せしこと、同士の内にも兎角の議論あり、拙者は決してゆづりませぬぞ 清四「イヤ瀬左衛門、其方は惣三郎を残せしを、兎角の云ひ分ありと申せしが、拙者未だ斯かることを聞かず、よろしければこそ、村松喜兵衛の一子三太夫は、同意いたして政右衛門を残したでないか、さう云ふ例は幾らもある、然らば瀬左衛門、其方のみ義を立てぬきてこの清四郎は不義の奴となつても介意はぬと申すのかッ」

瀬左「イヤ決してさうは申しませぬ、たゞ残ればとて、夫れが強ち不義となるわけでもござるまい 清四「然らば其方残つて家を継げい」

瀬左「イヤ夫れは不可ませぬ、一旦斯うと覺悟極めし上は、たとひ如何なることのお

りませうとも、一步も引きはいたしませぬッ 清四「ウム、然らば其方、ごうでも清四郎に楯つくかッ 瀬左「楯はつきません、が義のためには夫れを願ふはございませぬ 清四「左様申さば、拙者においても了簡あり、刀に掛けても残して見せるぞッ」

瀬左「面白い、私も武士でござる、一旦云い出せしことは、めつたに跡へは退きませぬッ 清四「ウム、さう申せば、オウ斯うじや……」と刀の柄に手を掛ける、瀬左衛門もキツとなる……」

節「アワヤ兄弟義のために、刃物に決着を取らんとす、斯くと見るより内藏助、ヤレ待て兩人早まるな、

地「ヤレ待てしばしと押し止め 内藏「兩人とも、いづれな劣らぬ義心の厚さ、内藏助ほどく感じ入つた、しかし、今斯く争ひ居つては果しがあるまい、よつてこの事は拙者に任せ、あしうは取り計はぬから……」

清四「お任せすれば何となりませぬ 内藏「されば、この場においていづれを残れとは申されぬ、よつて亡君の御墓前において御籤をあげ、その籤こそ、亡君の仰せと畏み、

即ち決を執るのが宜からう、何事も亡君のための御奉公じやから、亡君の仰せを背くことは出来まい、内藏助は甘いことを考へた、けれども兩人は面ふくらし、不服らしい。清四「大夫、この上は間十次郎、親六がごさく、兄弟ともに下向をお許し下されたい。内藏「イヤ間の例には慣いがたし、彼は跡に残る親兄弟もなきによつて、相許したのである、お身達とは同じからずこの義よく、勘考すべし」とどうしても許されぬ。清四「この上はモハヤ已むを得ませぬ、たゞ御指揮に待ちます。内藏「然らばこれより瑞光院にまゐり……」。

節「旨を了して内藏助、ハヤ瑞光院へと來にければ、やがて墓前へ進まれて……」。地「在すがごさく御墓前に、はじめ了りを委しく語り、さて忠孝の二本の圖、墓前に供へ。内藏「斯く御籤を備へまつりし上は、何卒亡君の御指揮を願います、イザ兄弟御前に進まれい。兄弟「ハ、ハッ」ズーツと進んで拜禮する」。

内藏「サツ、主君の御指揮、決して違背しては相成らぬぞ。兄弟「ハ、ハッ」」。節「こゝぞ浮沈にかゝはる大事、二人は心に神々を、念じまつりて東のお伴、ゆるさ

せたまへと一心不亂……」。

地「手を取り上げて押しいたゞき、封押し切れば孝の字は、兄清四郎の手にのこり、忠と云ふ字は瀬左衛門の、右手の上にご乗せられたり……」。

清四「ア、是非もなき世のさまや、同じ御恩を受けながら、この身は武運につきたるか」と墓前に伏して口惜なみだ、瀬左衛門はいそぐと、忠と云ふ字を押しいたゞいて嬉しなみだに暮れる、

節「されば兄の清四郎は、すごくととして國許へ、弟は京都へ足を止め、頃は元祿十四年、十月中旬の吉日を、えらんで京都を立ち出でる、ひそかに下る江戸表、敵の様子子の不明らぬに、苦心せらるゝその段は……」。

◎大高源吾苦心の段 茶事に假託せ吉良の在宿を知る

節「い、い、忠臣は孝子の門より出づとかや……」。

地「さて大高源吾忠雄の一門は、深く主君の恩の厚きにかんじ、主家斷絶の折からに

大石良雄の仇討の企圖に加擔し、誓紙連判に及んだる、その功勳は今も尙ほ、忠義の龜鑑と稱へらる……まづ第一に源吾忠雄、ついでには舍弟の小野寺秀富、伯父の小野寺十内、甥の岡野金右衛門、都合四人の忠臣を出す、このまた母がなかくの、確固もの、男まさりと云はるゝほどの女丈夫、この親にしてこの子あり、實に頼母しき一家一門……母は源吾、秀富、金右衛門を膝下にまねき。

母「さて其方達にこの母が聞くことがある、そもこたびの御家の不慮、今は住み馴れし赤穂を逐はるゝ、情けない身の上と相成つたることである、然るにお身達は立派な男子、厚き君恩のほごを、何と思ひ居るのであるかな……」とたづねる、源吾は直ぐに「源吾、コレは母上さまには否なおたづね、左様な義はお尋ねなくとも分り切つたことでござりまする、母「分り切つたとは、何が分つたのじや」

源吾「ハイ、分つたと申しましたは、君恩の厚きを思ひ、且主君の御切腹あそばした御無念を、晴させまゐらする分のこととござりまする」とキツバリ云ふ、この尾について幸右衛門秀富「幸右「コリヤ兄上さまの云はれた通り、我々は、既に赤穂城に、呼

を捨つべかりしものを、おめく今日まで生き永らへて居りまするは、ふかき考慮のあるからのこととござりまする」すると岡野金右衛門が、

金右「伯母さま、御安心をあそばしませ、私共は、みなこれ鐵石のごとき覺悟を持つて居るのでござりまするから、御心配は御無用になさりませい」

三人「今に母さま、仇敵上野介の首級をあげ、亡君の御無念を晴させまゐらせるでござりませうから、必ず御覽下さいまするやう……」と、三人は勇み立つて母に誓い母は機嫌斜めならず、

母「ウム、三人とも能き覺悟じや、夫れでこそこの母の子じや、耻を知るまことの武士じや、ウム、三人とも、イザとならば、必らず卑怯な舉動いたし、先祖の名を汚さぬやういたし呉れるやう」

三人「決して世の嘲笑ひを受くるがごときことは、誓つていたしはいたしませぬから御安心をあそばしまするやう……」母「然らば別れの盃をなさん、用意じや」と、「これから母子三人が、また逢ふまでのしるしとは、表面向、實はながきく永訣の

さかづみ……。

源吾「口には云はねど心では、互に夫れとかん付かれ……。」
地「同じさかづき事ではあれど、何となく重々しく、殊に源吾は孝心ふかきものであ
るだけ、それだけ心の哀しみが厚い……。」

源吾「モシ母上さま、吾等江戸へ下ることのありますれば、跡はさぞかしお心淋しか
らうと思ひますが、夫れもわづかな間のことでござりまするで、ごうか御辛抱をあ
そばしまするやう……。」

母「オウ、私はお前達の、歸つて来ないのを望むのじや」

源吾「エツ、何と仰しやいます 母「さればじや、仇討はお國の法度、夫れを冒して討
ち取るからは、ヨモそのまゝには許されまじ、夫れじやで私は今日かぎり、お前達
世に亡きものと思ふて居るのじや……。」

源吾「へエー 母「またお前達もじや、一旦江戸へ下るからは、必らず母ありと思ふな
よ、殊に源吾、お前には特更に言ひ聞かして置く、必らず母の在ることを忘れ呉れる

やう、兎角お前は女々しくて困る 源吾「ハイ、御教訓、骨身に徹へて、有りがたうぞ
んじまする 母「されば三人ともに、目出度う出立いたすやうに……。」

節「男まさりの母親が、言葉に源吾は身のめまり、有りがたなみだハラ／＼と、一む
ら荒む秋時雨……。」 地「互に盡きぬ名残のさかづき、酌み交しつゝ永訣を告げ、見送

る母に見返る源吾、心で泣いても目に泣かぬ、丈夫の魂、勵ます母の言葉をしほに
三人は江戸へと旅の空……。」 源吾、幸右衛門、金右衛門の三人は、一旦は京都に足
を停め、萬事を内藏助の指揮に任し、やがて江戸へ下つて来る、源吾は江戸へ遣入る
と、直に大小を捨て、町人風情となつて、京都の呉服屋新兵衛と云ふ觸れ込み、本所
は堀部の隠れ家へ遣つて来る……。」 源吾「ハイ、御免なさらませ」安兵衛の妻が夫れ
へ出ると、見慣れぬ男 妻「ハイ、誰何さまでございます」

源吾「ハイ、私は京都の呉服屋新兵衛と申しまするもので……。」

妻「ア、呉服屋さんでございませうか、折角でございませうが、一寸御用はござりませぬ
ので……。」 源吾「でござりまするか、エー實は少しお傳手りものがござりまして、御

主人にお面會り度うござります 妻「へエ、お傳手物とは……………」

源吾「イエ、お目にかゝりますれば、直ぐに分ります 妻「左様でござりまするか、デハ一寸お待ち下さいまするやう」と「妻は直ぐに奥の室、良夫武庸、父の金丸同席のところへまゐり「モシ旦那さまへ、京都の呉服屋さんが見えまして、貴夫にお目にかゝりたいと申して居ります 安兵「フーム、京都の呉服屋に近付は無いはずじやが……名は何と云つたかな 妻「ハイ、確か新兵衛とか申しました、

安兵「新兵衛……………知らぬな、呉服屋なんかなら、用があると云つたつて知れて居やう、留守だと云つて返して了つたが宜い」

妻「へエー、でもお在留だと申しましたので……………」すると金丸が、

彌兵「ア、安兵衛待て〜、京都と云へばなつかしい、またごんなことで、同士の人から傳手でもあるのかも知れない、逢ふたところで損の行かぬ話じや、逢ふて遣れ

安兵「ハイ、では此室へ通して呉れ 妻「ハイ〜、宜しうございます」と妻は引き退がる、入り違へて源吾は奥へ遣つて來て闕越しに、

源吾「エー、これは旦那さま、お初にお目にかゝります、私は京都の呉服屋、新兵衛と申すもの、御最負にお願ひ申します 安兵「ウム、拙者は堀部安兵衛じやが、何か用件でもあるのかな 源吾「ハイ、少しお話し申し上げたいことがござりまして……安兵「フーム、用事があるとは、私はまだお前を見るのは初めじやが、一体用件と云ふのは何じやな 源吾「ハイ、外でもござりませぬ、例の吉良家の一件で……………」

安兵「ゲエーッ」彌兵衛も驚いて 彌兵「エーッ、メツ、滅多なことを……………其方は自体何者じやッ 安兵「何者であるかッ」と親子は思はずキツとなる……………」

源吾「ハ、ハ、ハ、さう驚きなさることはない、伯父さま、安兵衛どの、拙者じや拙者〜 兩人「エツ、私じやとは誰じや……………」と眼を睜る、

源吾「コリヤ可訝しい、分らぬかな、そりやア有りがたい、拙者じや源吾じや、大高源吾じや 兩人「エーッ」と兩人は吃驚「さう云はれて能く〜見ると、なるほど、源吾の俵があるので、親子は呆れ返つて居る「安兵衛は 安兵「オイ源吾、何だつて、ソんな詰らない真似をして、駭かすんだ、止せ〜、吃驚したぞ」

源吾「ハ、、、、ごうじや安兵衛、甘く化けたらうが」

安兵「ウム、なか／＼甘い、ごうじても源吾とは見えない、巧なものじや、いつそ武士を止めて、歌舞伎役者になつてはごうじや 源吾「ハ、、、、馬鹿なことを云へ、しかしお前達親子の衆に、氣付かぬくらゐなら、ヨモヤ吉良家にはがんづくまい」

安兵「この分なら大丈夫じや…………… 源吾「有りがたい、江戸入りのまづ第一の成功じや、喜んで呉れ、しかしその後の様子はごうであるな……………」

安兵「されば、まづ飲みながら語らうかな」と云つてるところへ、妻が氣を利かして酒肴を持つて来る 妻「モシ、源吾さま、貴君 甘くお欺しなさいましたな、何も私達親子まで、お誑りなさらいでも……………お恨みでございますよ」

源吾「これは痛み入ります、まづ皮切りに行つて見ました、ハ、、、、」
妻「オホ、、、、サアごうぞお召し喚つて…………… 源吾「有りがたうぞんじまする」

「これから酒になつて、親子は源吾を取り巻いて、國許の事京都の事を聞き、また安兵衛からは江戸の様子を物語り、油断のならぬ事であると、宜きほどにして源吾はも

どの呉服屋新兵衛「エ、これはいろ／＼御馳走になりました有りがたうぞんじまする、では御注文の品は、早々織元へ申し遣はしますので……………ヘエ、これはごうも有りがたうぞんじまする」とベコ／＼頭を低げる、

安兵「ハ、何を吐すぞい 妻「オホ、、、、マア源吾さまのお巧手で入らつしやること……………」と笑ひながらにかんしんする、彌兵衛もともに感じ入つたが……………」

彌兵「宜くも化けたり、彌兵衛も感じ入つた、しかし源吾、鵬までも町人に相成つては成らぬぞ 源吾「伯火さま、心は清き大高源吾、御安心をなさいまし」

彌兵「ウム、夫れでこそ母御も安堵、折角亡君のため、盡し呉れるやう」
源吾「ハイ、もとより命を鴻毛の軽きに置き、義を泰山の重きに置き、故主のために、盡す考へでござりまする 彌兵「ウム、豪いぞ、」

源吾「ではモウお暇申しまする」
彌兵「ア、コリヤ新兵衛、待て／＼ 源吾「ハイ／＼、何か御用でござりまするか、」

エ／＼ 彌兵「ハ、、、、なか／＼甘いぞ 源吾「御串山戯もんでござりまする」と、
「源吾はそのまゝ隠れ家へ歸つて来る、」

節「天は眞誠を照したまふとか、こゝに圖らず大高源吾、仇敵の在所を嗅ぎ知るはなし、源吾苦心の一段となる……。」

地「或る日のこと、堀部安兵衛武庸は、在所なさにブラ〜と、淺草から藏前通りを日本橋から京橋の、魚河岸のところを、目的なしにブラ〜步行して居る、すると魚河岸の方から五十に手の届きさうな、頸に永い髭を生じた、十徳を着込んだ男、手に箒包みを提げて遣つて来る……。」

男「オウ、これは堀部氏ではないかな」と聲かける、安兵衛見ると、かねて昵近にする神占家の羽倉齋と云ふものだから、安兵衛「オツ、これは珍らしい、羽倉氏かな」

齋「如何にも、ごちらへ枉せられるかな、安兵衛何處と云ふあてもなく、ブラ〜步行して居るところじや、しかしお身は何じやな、甘さうなものを提げて……。」

齋「ハ、ハ、ハ、これは好物の鮪じや、昨日一寸甘い口が開いたので、今日は稼業を休み、一杯飲らうと云ふところじや、どうじや安兵衛さま、今は立派な堀部氏じやがどうじやな、昔のグヅ安となつて……。」

安兵衛「コレ〜、大きな聲で云ふな、齋「どうじや、奢るが、一杯飲まぬかな」

安兵衛「有りがたいな、酒と聞いちやア見通すことの出來ない安兵衛、葬送の振舞酒でも飲むほどのもんじや、殊に祝の酒とありやア有りがたい、ウンと、へべレケになるまで飲んで遣らう、齋「何もへべレケになるまで飲まさうとは云はぬ」

安兵衛「兎に角御馳走にならうかな、齋「では一緒に歸らう」と「これから三十間堀は、中島五郎作の店へと歸つて来る『サア安兵衛上つて呉れ』

安兵衛「オツ、汚いな、ごみ溜のやうな宅だな、齋「豪さうなことを云ふな、お前だつて以前、齋岸島の宅は何だ、猫の額のやうな、小穢ねへ宅じやつたじやないか」

安兵衛「オウ、さうだ〜、俺は今日は、以前の、グヅ安で御馳走になるんだつてな、ウツカリ忘れて居た、齋「ハ、ハ、ハ、相變らず罪のない、面白い男じや、サア、支度が出来たから飲り初めやう、安兵衛「オツ、有りがたいぞ、オツ、恐ろしい熱燗だな、グビ〜」するとかね〜招待してあつたものと見えて、家主五郎作をはじめ、店子四五人も遣つて来る、お酒が廻つて来る、めい〜勝手な熱を吹く、唄ふ踊る、わ

めい、その八ヶましいこと、耳を聳するばかり、然るにこの家主の五郎作一人は、ジ
 ーツと行儀に、小笠原流に平坐り込んで居るから、安兵衛は五郎作に、盃を献しながら
 「家主さま、貴君はいかうお行儀に入らせられるが、どうです、一つ隠し藝でも出
 して、踊られては……」五郎「イヤ〜私はそんな器用なことは出来ぬ、殊に行儀と
 云ふものは、たとへ御酒の席でも、決して崩すべきものでないと、かね〜御師匠が
 申された、夫れじやで斯うしてかしこまつて居ますのじや」
 安兵「ハ、ア、では何かお花のお稽古でも爲すつて……」すると傍から齋が口を出
 して……齋「イヤ安兵衛どの、家主さんはこの頃お茶の湯に御熱心で……」
 安兵「茶の湯、けつかうですな、茶の日本の行儀のみなかみとか申して……」
 齋「夫れにモウ今に免許皆傳と云ふところまで漕ぎ付けられたので、なか〜大した
 もんだ……」五郎「ナーニ、左様なに云ふほどでもないが……」と鼻をビョ〜、
 安兵衛は面白半分、おだて、遣らうと、
 安兵「イヤ感心々々、なか〜もつて茶の湯と云ふものは、六かしいものださうで、

拙者なども茶は好きじやが、トンと作法をわきまへぬので困るじやが、しかし家主さ
 んなどは、お人柄だから、一入ゆかしう思はれる」
 齋「その通り、〜、第一お師匠が豪い人だから……何しろ今江戸のお大名衆のお
 邸宅へは、どこへでもお出入なされ、なか〜お仲間では、幅をお利かせなさるねえ
 家主さん、左様でござりませう 五郎「ハ、さうじや、私が師匠は山田宗遍と云つて
 な、江戸の茶の宗匠の束ねを勤て居られるで、お大名は、ごこのお邸宅へでもお出入
 なさる、殊に日毎にお召し出しになるのは、薬研堀の松平さま、赤坂の本多さま、神
 田錦町の井伊さま、本所の吉良さまなどは、お大名中でも、お茶凝りで入らしつて、
 夫れは〜宗匠をお最良にあそばします、お蔭で手前もチョコ〜、お大名のお屋敷
 へ、列したことがござりまする」と自慢の鼻をビョつかす、
 齋「聞いた此方の安兵衛は、生酔本性違はずに、吉良の邸宅の様子をば、片時たりと
 て聞きたしと……」
 地「安兵衛は心の中に、犬も歩けば棒に當る、自慢の鼻にぶらさがり、邸宅の様子

を聞いて遣やらうとグツと飲んださかづきを、家主に指しながら」

安兵「左様かな、しかし家主さんなどは甘いものだな、拙者などは二本帯し居つても、浪々の身のかなしさ、左様な風流なことも知らねば、またお大名のお邸宅などは些とも知らぬ家主さん、お大名のお邸宅などは、すいふんと立派なものでござらうな」

五郎「左様、結構も何も無い、モウ私の家などは、廁ほごにも無い、だから家へ歸つて來ると否になつて了ふ 安兵「左様でござらう、しかしお前さまのお出でたお邸宅の中で、誰さまのお邸宅が一番立派でござりましたな」

五郎「左様じやな、まづ吉良様のが一番立派じやな 安兵「へエー、でも吉良さまはたつた四千石の御高家衆ではござらぬか 五郎「サア、そこじやで、私も委しいことは知らないが、吉良さまは御有福に在らせられる上に、上杉さまが吉良さまのお子さまが入らして居られると云ふことでなか／＼お前さまお邸宅は立派なものじやで……」

節「こゝぞとばかり安兵衛は、素知らぬ顔に家主を覗き……」

地「へエー、デハ何ですな、お大名の松平さま、本多さま、井伊さまより、お立派で

すかな 五郎「そりやアモウ、テンデお話しならぬくらゐの相違じや、第一お茶の間のこしら、からして違ふ 安兵「へエー、ではどういふところが違ひまするな」

五郎「まづ外さまのお茶室は、みな御本家に引付いて居りましてやう／＼八帖か十帖くらゐであるふが、吉良さまのは、二十帖の大廣間で、夫れが棟を別つてあるだけ、違つたところがあるのじや 安兵「へエーではお茶室は棟を隔つて居りまするので……」

五郎「そうじや 安兵「ではお邸宅もなか／＼お立派なものでございませうな」

五郎「ソリヤお前さん、結構善美を盡したもので……十一室百二十帖か間があること云ふことじや 安兵「へエー、貴君はお座敷を拜見になりましたかな」

五郎「イヤ、私はまだ拜見はせぬが、お茶の室だけは拜見した」

安兵「夫れは何より結構でござりました、つまりはこれもお茶のお徳と云ふのでござらう、どうか手前もお茶でも稽古いたし、お大名に近付きたい、自然仕官の途の標石ともならうからな……」

「尙ほいろ／＼とよそ／＼しく、家主と話をいたしたが、モクこれ以上に便りを得ぬ……」

「箭」いさゝかなりとも敵の様子、知り得たることなれば、早々にして石町の、内藏助
がかくれ家へ、一目散……。

地「安兵衛は闖らす敵の様子を知り、何かの便宜になるであらうと、石町は内藏助が
隠れ家へと遣つて来る……」内藏助は直ぐに奥へと通す、安兵衛は一禮に及び

安兵「さて太夫どの、實は今日斯うく云々にて……」と、有りし次第を物語り

安兵「之れによつて見るときは、敵の在宿を知るには、茶人を指し向けるが、捷徑で
はあるまいかと思はれますが……」

内藏「ウム、能きことを仰せ聞け下さいました、實は拙者においても、吉良どのの在
宿を知るに、心を痛め居りましたが、しかしこのお話は何日頃の事でござるかな……

安兵「この事は未だ主君御在世中のことでござるが、兎に角彼が茶事に心を委ね居る
ことは事實でござる。内藏「左様か、イヤ、能くお知らせ下された、では拙者において

一考いたすでごさうから、御身は尙ほ彼が下に出入のいたし、夫れとなく様子を
探り下さりますやう。安兵「その義は御心配下さいまするな、では拙者は御免を蒙り

りまする」と「安兵衛は歸つて了ふ、跡に内藏助は一思案、同士の内に茶事に堪能な

るものは、今誰々であらうかな……」と指折りかぞへたが、その最期の指にかゝつ
たのが、大高源吾忠雄その人……「ウム、源吾を措いて他には無い、彼は才氣あり

殊に文學の道にも明るく、茶事にも堪能であると聞き及ぶ、さればこの大役は、彼の
手を煩はすより外はない」と「思案の末に内藏助、やうく文したため、源吾のか

い、家へと遣はす、源吾之れを見て、何事ならんと、取るものも取り敢へず遣つて來
る……」太夫どの、何か御用でござりまするか

内藏「オツ大高氏、早速の御來車、過分に存する、實は御身を煩はしたき義の出來申
したのでござる。源吾「如何なることでござりまするな」

内藏「實は斯やうく云々にて……」と、有りし次第を物語り、
内藏「御身ならざればこの義仕了せがたし、主君のため、粉骨、御盡力にあづかりた

い。源吾「ハッ、斯かる大役、能く拙者に仰せ聞け下さいました、有りがたうぞんじま
する、今に吉左右お知らせ申します。内藏「萬事は堀部殿と御内談のいたされて……

源吾「ハッ、節義のため奮ふ大高源吾、勇んで邸宅を出られたが、直ぐその足で堀の邸へと急がれる……。」

地「堀部と合ふて委細を聞き、同道で三十間堀の家主中島五郎作方へと遣つて来る、

「安兵衛はモウ五郎作とは、配近になつて居るから、直ぐに座敷へ通される、

五郎「能く来られた、サアズーッとお進み下されたい」

安兵「御免下さい、エー五郎作どの、かね／＼お話し申し、茶事に心を入る、呉服屋

新兵衛は、この男でござる 新兵「エー、これは初めてお目にかゝります、私は呉服屋

新兵衛と申すもので、御最負に願ひまする」

五郎「ア、左様でござりまするか、私は中島五郎作と申しまする」と挨拶が済むと

五郎「で、お前さまが山田へ弟子入をいたしたいと云はれるのかな」

新兵「ハイ、左様で、エー、實は御當地に居ります間に、能き師匠に就き、お稽古を願ひたいと心得まして、へエ……。」

五郎「イヤ、お若いに似ぬ感心なお心がけ、宜しうございます、私からお話いたしませう」

新兵「どうか宜しうお願い申します……。」傍で安兵衛、源吾の巧な言葉づかいに

舌を巻き、この分ならめつたにお里の知れる氣遣は無いと安心する「さてこゝで話が

纏まつて、安兵衛は引き取つて了ふ、五郎作は源吾を連れて、山田宗遍宗匠の邸宅へ

と遣つて来る、萬事は五郎作の肝煎で、直ぐに話がまとまり、こゝに師弟の約束が

来る、源吾は胸に一物があるから、三日にあげず音物を持つて行つて、宗遍の氣に入

るやうにする、夫れで宗遍の手許で、チョ／＼忠實々々しく立ち働き、なか／＼巧

に取り入る、宗遍も宜き弟子を得たものと、心のかぎり教へる、けれども源吾は茶の

道などは些とも習いたくはないので……たゞ吉良家の様子を、夫れとなく考へて

居る「源吾は或る日酒肴を持ち込み」

源吾「先生々々、宗匠「何じやな、新兵衛さん 源吾「今日はお先生、私の誕生日に當り

ましたので、聊か心祝をいたさんため、粗酒を持つてまゐりました、召し喫つて下

さい、宗匠「ア、左様か、夫れはまいど氣の毒じやな」

源吾「何の、お前さま、祝でござりまするで……。」

宗匠「では頂かうかな 源吾「私がお相手をいたします 宗匠「夫れは忝けない……とグビ／＼と飲りはじめめる 『下地は好きなり御意はよし、二人は献しつ酬へつ、飲つて居る内、互にホロリと酔が廻る……』 源吾「宗匠は宗匠に打ち向ひ、

源吾「先生、私もおかげさまで、大分筋道も分つてまゐりましたが、この上のお願ひには、どうかお大名のお茶席に列したうござります」

宗匠「夫れは最と易いこと、折を見て連れて行つて進せやう」

源吾「どうかねえ、是非一度は行つて見たいと思います、またお大名の、けつかうな座敷をも拜見いたしたいのが望みでござります」

宗匠「ハア、宜しい／＼、斯うして師弟の約束をいたすのも、何かの因縁、宜しいとも／＼、キツと拙者がお連れ申さうから……」

源吾「ハイ、どうかよろしうお頼み申します、ではモウお暇申します」

宗匠「マア宜いではないか、遊びなさい、お話でも仕ませうから……」

源吾「ハイ、有りがたうぞんじます、今日はこれからお寺へ参詣いたさねばなり

ませぬで、六日の朝から伺ひます 宗匠「イヤ明後日は吉良殿お邸宅に、朝會があるの

で、朝の内は困るが……」

源吾「エーツ、では六日の日、吉良さまに朝會が……」

宗匠「ウム、夫れじやで朝から来て呉れては困る」

節「嬉しや天に口なくも、人をもつて云はしむる、圖らず聞いた朝會なりや、前夜は屋敷に居るに相違ない、ヤレ 忝なやと大高源吾、心に北叟笑まれたが、色にも出さず、ハ、ハ、ハ……」

地「では先生、この六日の朝會に、お連れなされて下さりませ」

宗匠「イヤ折角じやが、朝會には、なみ／＼のお客はなさらぬじやで、お連れ申すことは出来ない 源吾「夫れは残念でござりまするな 宗匠「イヤ／＼、吉良さまなら、モ

ウ三日にあげず御會を催されるから、何日でも連れ申すことが出来まするから、この日になさい 源吾「夫れはまことに残念なことでござりまするが、どうもいたし方が

ござりませぬ、では午後でも伺ひまして、御模様を承はりまする」

宗匠「では左様なさい、この次にでもお連れ申しますから」
源吾「では御免を蒙ります………」と、
節「邸宅を出ると大高源吾、天を拜し地を拜し、飛ぶがごとくに石町の、太夫の隠家へと駈け付ける………」

地「源吾は直ぐに奥へ通ると、息吐き敢へず 源吾「太夫どの、仇敵の在所が知れましてござりまする 内藏「エッ、知れたか 源吾「ハイ、分りました、實は斯う云々でござりまする」と一伍一什を物語り、 源吾「太夫どの、この義萬一違ひあるべからずと信じまする 内藏「ウム、能くぞお調べ下された、然らば討入は五日、即ち明夜といたさうかな 源吾「左様でござりまするな、モハヤ五日夜は在宿に相違あるまいと思はれまするで………」 内藏「しかし尚ほ篤と御探り下さるやう 源吾「心得ましてござりまする内藏助は尚ほ油断なるまじと、堅く源吾を戒めて出し遣り、直ぐに同士を集めて會議を開く………」 源吾はまた明日の夜のことであるから、今日明日中に篤と探りを入れやうと、本所なる吉良の邸宅の界限をウロウロ、様子をさぐり、やうくのこと

三十間堀は、家主五郎作の家へ遣つて来る………」 五郎作は夫れと見るより」

五郎「オウ新兵衛さん、久しく逢いませぬが、相變らずお凝りかな」

源吾「オウ、五郎作さま、ごうも私は残念なことをいたした」

五郎「何か損失でも仕なさつたのか………」 源吾「イ、エ、商賣の方ではなく、先生の

方で………」 五郎「フーム、先生の方で、夫れはごうなすつた………」

源吾「イヤ實は明後日の朝、吉良さまのお茶會に、是非連れて行つて呉れと頼みましたが、朝會には連れて行けぬと断られましたので………」

五郎「左様か、夫れはマア残念なこと、しかし六日の朝會は、お中止になつたと云ふことじやか………」 源吾「エッ、夫りやア本統でござりまするか」

五郎「ハイ、實は私も先生の補助として、出席することになつて居りましたが、今し方先生の方から、お中止になつたと知らせてまゐられました」

源吾「オヤ、マア左様でござりましたか」と云つたが、思はず落膽いたし、早々こゝを立ち出で、直ぐに内藏助の方へ取つて返し、斯くと内藏助以下、集まり來り

し同士の右の赴を報告すると、みなく非常に残念に思つたが、何しろ相手次第だから仕様がなない。内蔵「夫れはまことに残念なことである、しかしこれはまだこの時機の至らぬのでござらう、尙ほこの上ながら仔細にお探り下さるやう」

源吾「ハイ、折角在所を知らながら、残念でござります」

内蔵「しかし彼は、我々の様子をさぐり居るものか、一日として居所を定めず、今日上杉にあるかと思れば、ハヤくも明日は本所にあり、また一兩日の中には、呉服橋の屋敷に到ると云ふ、少しも油断ならぬ奴、されば我々の苦心いたすは、彼の在宿を知ることとござる、最も確とたしかめざれば、めつたに事は擧げがたきこととござればこの役義一つに御身の双肩にあり、能く勤められるやう……」

源吾「宜しうござります。内蔵「彼も麻布に新宅を設へ、春ともなれば、彼處に引き移るやも圖りがたし、ごうか年内に事を運ばせたいと心得申す」

源吾「イヤ御道理でござりまする、キツと確たることを、探り出しまするでござりまする……」と「暇を告げて立ち歸る、諸士もむざむざ立ち歸る、さても大高源吾ど

のは、何卒して仇敵の在宿を確かめたきものであると、一日置いて六日の日、山田宗遍の宅へと志ざし……」

節「一敗は一敗より、志氣の勵むは勇士の毎、さても大高源吾ごのは、太夫に誓ひ同士のたのまれ、四十七士の面々の、生命をあづかる大事の役目、仕遂せて亡君の仇、討たんづものど心を確め……」

地「また何か手土産をもつて、宗遍の邸宅へ遣つて来る……」先生今日は……」

宗匠「オツ、これは新兵衛さまか、サアごうぞお上り……」

源吾「ハイ、有りがだうぞんじまする、先生お一つ……」宗匠「毎度これはどうもお心ぞへ、恐れ入りまするな。源吾「ナニ、ソソんなに御しやるほどのこととござりませぬ、しかし先生、吉良さまの朝會は、お中止になりまらたさうで……」

宗匠「ハイ、急にお模様が変わつたとやらで、お断りに見えましたので……」

源吾「夫れはマア宜い氣味でござりました。宗匠「何、好い氣味とは……」

源吾「サア私を連れて行つて貰へぬやうなお會は、ドシ、お中止になる方が宜しう

ござります。宗匠「夫れでは拙者が困るでないか。源吾でも私は介意いません」
 宗匠「無茶を云ふ仁じやな。ハ、ハ、ハ、ハ、源吾は話の端緒を放さぬやう、何歟と取り入つて聞き糺す、宗遍はこの新兵衛が、忠義無類の大高源吾忠雄であらうとは、夢にも知らない、己の見て来ただけの事を、能く話して聞かす、源吾は微細なことまでも、聞き洩すまじと、耳を立てる「ところへ一人の下僕文箱を持つて」
 下僕「ハイ、御免下さいませ……宗匠「ハイ、ごなたじやな。下僕「エ、お手紙でござりまする。源吾「拙者が取り次ぎませう」と右の文を受け取り宗遍にわたす、宗遍「手を取り上げて読み下し、サラ／＼と返書をしたゝめて下僕にわたす」
 宗匠「さて、新兵衛どの、お喜びなさい、お前さまの願いが届きましたぞ」
 新兵「エ、ッ、節「願事の、さうきたりとは延喜よしと、まづニツコリと大高源吾……地「先生、願いの届くとは、何事でございまするな……宗匠「されば、まづ之れを見られよ……」と差し出す文、源吾は何事ならんと読み下すと……」

前略御免被下べく候借而来る十四日、十九日両日、主人久々にて、御一統御招きの上、御會催さるべく候につき、兩日とも、お出で被下べく、主人より申し聞けられ候へば、お出で被下べく候

十二月六日

山田宗遍どのへ

吉良家内 齋藤宮内

と、墨あとあざやかに記されてある……。

節「讀んだ此方の源吾どの、天へものぼる喜びを色にも出さず知らぬ顔、手紙を置いて……」

地「このお手紙によりますると、吉良さまには、十四日と十九日にお茶會を催さるゝこのことにござりまするが……」

宗匠「されば、御身がかね／＼の望み通り、御殿のもやう、また御席のありさまなどを見せ申す時節の到来いたしましたのでござりまする」

源吾「夫れは嬉しいことでございます。宗匠「しかし十四日は、手前外様にお約束の

事あり、とても十四日はまゐり難しと、今返事を遣はしたのでござりますが、お身の都合にて、十四日にも十九日にも、都合よろしき方に、御連れ申すことにいたしませう。源吾「ハイ有りがたうぞんじます。宗匠「もつとも十二日にも去る御大名の御會がござりますが、これは御役柄にて同道なり難き義にござりまする、しかしなまじ外様よりは、吉良さまは、何事にもなかくにおもしくしく、その代りに、御邸宅の御様子などは、とても及ぶべくもなき結構でござりまするで、成るべくは吉良さまのお邸宅を御覽あそばす方、後のお爲によろしからうと思ひまする……。」

源吾「私も是非さう願いたいと思ひまする……。」

宗匠「では十四日に御同道申しませうかな。源吾「イヤ、實は十四日には、よんどころなき用事のありまして、残念ながらまゐることは出来ません。」

宗匠「夫れは不可ぬな。源吾「仕方がございませぬ、何卒十九日の御會にお召し連れ下さいませるやう……。」

宗吾「左様か、實は新兵衛どの、私はな、十四日は外さまへまゐり、トテも吉良さまへまゐることは出来ぬのじやが、日頃の御身が志にめんじ、

是非お飾り付けだけなりとも、御身に拜見いたさせ申したいと思ふのじや……。」と申すのは、十四日は宵から四ツ時までの會でござつて、御両家の御出であり、かたんによろづに事あらたまり、格別の御事と思ひまする、然るに十九日の御會は、節分の御會にて、御子息左兵衛どのと拙者との二人きりにて、格別の御會でもござらねば、御飾りなども平常の通り、何の風情にもならぬことゆゑせひ十四日の御會をお見せ申したいと思ひまするのじや。」

節「こゝぞとばかり大高は、心の喜び色にも出さず……。」

地「夫れはまことに残念でござります、しかし十四日の御會が、去るお立派のものでござりまするとなれば、ごうかして拜見いたしたいもので……。」

エー、コート……。」

と一思案。源吾「先生、私用事は五ツ半頃に済みまするが、先生には夫れまでに、外様の御用を済ませられ、四ツ時から拙者をお召し連れ下さいましては如何でござりませう」と心を引く。宗遍はこの新兵衛が、吉良家を狙ふ赤穂の浪士、大高源吾忠雄であらうとは、夢にも知らぬこと、たゞ平の町人、呉服屋新兵衛どのみ思ひ込んで居る

から、ツイペラ〜と饒舌つて了ふ……」宗遍は首を横に振つて」

宗匠「イヤ夫れは不可ぬ 源吾「トハまた何故でござります」宗遍は聲をひそめ、宗匠「大きな聲では云はれませぬが、新兵衛さん、實は去年の三月十四日の日、殿中で騒動のあつてからと云ふものは、浅野さまの浪人衆が、吉良さまを附け狙つて居るとやらで……」源吾は之れを聞くと、腋の下からジワ〜と冷汗が流れて来る、感付かれまじと堅くなつて居る、宗遍は知らぬ顔 宗匠「夫れがあつてからは、お上でも御用心あそばすのか、如何なことのありませうとも、御客は五ツかざりで、夫れより遅れさせられることはござりませぬ、しかしこの十四日の夜ばかりは、御両家格別の御約束、ことに久々の御事でもあり、四ツまで刻限を延されたので、十九日の節分をすこせせられては、白銀のお邸へお移りあるとのことなれば、お會の果てる頃ほひに参郎も如何なもの、思へば残念なことでござるな」

源吾「ではどうか十九日の日に……」宗匠「宜しい、お連れ申ませう」
節「仇敵の在宿知れたるか、これと申すも主君が、御陰にあつて守護らせたまふか、

ハ、ツ、有りがたや忝けなや……」と、

地「雀躍いたして源吾どの、足も地へは付いては居ない、横筋違に石町へ、飛ぶがごとくに駆け付ける 節「源吾が苦心空がらず、四ツ時のお引けとあれば、よもそれから逃げることは出来まい……」

地「いよ〜仇敵討、吉良邸打ち入りは、十四日と極まつたりと、内藏助から同士一般へ告げ知らすこれを聞いて、勇み立ちたる四十七士、決死の覚悟あらはれて、今に高輪泉岳寺、葬られたる忠臣義烈……」

節「山をぬく、力もぬけて松の雪……雪の曙の踏みしだき、兩國橋の引き揚げに、その名を唱ふ大高源吾の風流たはなし……次にゆづつて……」

◎村松三太夫傳 人柱試めし斬より竹屋五郎兵衛訣別の段

節「誠實ある、武士は直なる竹ぞとは、曲まぬ心大雪に、撓まず屈げぬ志操、實に尊きは日の本の、大和魂、旭日に匂ふやま櫻、義士が中にも優れたる、腕にひいた三

太夫、打ち入りの夜の前ひと夜、大黒柱のためし斬、今に残りし武勇の談話、さらばこれから演べ上げる……。

地「村松三太夫は淺野家において、二十石五人扶持を頂きし、村松喜兵衛秀直の嫡男で、義士の中でも腕利の一人、吉良家討入において、一番槍の功名させしほどの剛勇者、當年二十七歳の男ざかり、江戸の騒動の片付くと間もなう、父喜兵衛とともく、に赤穂に下り、内藏助に腹を語り、連判状には血判いたし、再び江戸へと下られて、敵の様子を窺はれる……三太夫は江戸常府であつただけ、江戸の町には馴染が多い殊に入魂にいたすのは、神田柳原の研師竹屋五郎兵衛と云へる男、三太夫はブラリと五郎兵衛方に遣つて来る……三太「ヤア五郎兵衛どうじやな」

五郎「オツ、これは三太夫さまでござりまするか……と云ひたいが、どうもお前さまにも困りましたな 三太「何故困る 五郎「その身装はどうですか、まるでお乞食から剩餘を取りさうですが…… 三太「仕方がない、無い袖は振れないじやないか」
五郎「イヤ無いことはない、私が御貸し申しただけでも、羽織が三枚、衣服が七枚、

どうなさいました 三太「ハ、ハ、ハ、彼れはみな呑んぢまつた」

五郎「サア夫れだから困ると云ふんで……ソんなキマヅイ風姿をして、家へ出遣入せられては困ります、外聞がわるい 三太「悪ければ外聞の宜いやうに、衣服を看せろ

五郎「ソ、そんな無法なことを云ふ奴がありますか、まア前の溝から捌きなさい」

三太「この溝をかへ 五郎「イヤ別らないな、十枚の衣服をお返しなさいよ」

三太「彼りやアモウ介意はん 五郎「ジョ申山戯云つちやア不可ません、モウお前さんには懲々した、お前さんに金を借したり衣服を貸すのは、穢多村へ猪を逐ひ込んだやうなものですわ…… 三太「介意はぬからズン／＼逐い込め」

五郎「置いて下さい、馬鹿々々しい、お前と云ふヤクザな人間はありやア仕ない、立派な腕を持ちながら、耻を知らぬ不能た風姿、淺野さまも斯んな御家來があつたればこそ、ア、むごらしい御家が潰れたのじや 三太「エーッ」と萎れたが、直ぐに氣を替へ 三太「ハ、ハ、ハ、また五郎兵衛の十八番が初まつた、モウ耳がたこになつて居るぞ 五郎「夫じやから不可ないのじや、これから心を入替へて、何處へなりと仕官を仕

なさい、五十石はブラ付いてる代物……三太「イヤ、實は方々頼み聞いたが、帯に短し褌に長しで、これもこれも氣に入つた大名が無いから仕方がないわ」

五郎「モウ今度は何處かの御家來とならるゝまで、拙宅方へは來て下さるな、店の外聞がわるいから……三太「マアソソなに云はないで、久し振じや、一杯呑ませい……」

五郎「不可ませんよ、久し振だと、昨日來なすつたじやないか」

三太「ハア、お前には毎日逢ふが、拙者の云ふのはお酒に御無沙汰をしたと云ふのじや、五郎「ソツその言葉が癢に障るんじや、今日は出ませんよ、マア行てくれ」

三太「さうお乞食のやうに申すな、呑ませ〜五郎「出ませんよ……」

三太「切めて一合だけでも呑ませろ、咽喉がグイ〜云つてまゐつた」

五郎「グウ〜云はうとスウ〜云はうと、ソソなことは知りませんよ、お歸り〜三太「意地のわるいことを申すな、マアさう云はないで呑ませろよ」

五郎「イエ〜、たとい何と仰しやつたつて、出ませんよ……」

三太「いよく出さないな、五郎「あたりまへでさア、川へ投げりやア、チャンブンと

でも音がする、お前さんののはギクンと咽喉笛を突き刺したやうなもので、何の役にも立たないじやないか、三太「ではいよく呑まさんな、ヨシ、呑まさんにや呑まさんぬで宜い、家へ火を放けて遣るから左様思へッ」と燧を取り出す、

五郎「ソツソソな無茶なことをして貰らうてはなりませんぞ」

三太「夫れが否なら酒を呑ませろ、五郎「イヤ呑まさんぬ〜、どうあつても今日は呑まさんぬ、三太「宜し、さう吐しやアいよく放火じやッ」やつさもつさの折からに、奥から娘のお光さんが飛んで出て、お光「アレサお父さま、店の端で、何を八かましく云つて居なさるの、お静かになさいな、五郎「オツ光か、助けて呉れ、この亂暴者を放り出して呉れ、堪らぬ〜、お光「マアお父さんのものゝ云いやう、村松さまに失禮じやございませんか、何も八かましく仰しやることはないじやないか、御馳走をなされば宜いではないか、三太「ヤアお光ごのはわかりが宜い、夫れが宜い、何も人を喜ばせて置けば永命する、人助けじや、驕れ〜、五郎「コラッお光、汝までが三太夫の肩を持つ奴があるかッ、馬鹿者奴ッ、お光「何も肩を持つわけじやないが、別に村松さまに今御

馳走を仕たからと云つて、夫れがために家の財産が傾くと云ふわけではなし」

三太「その通り」五郎「コラッ、光己れ何ぞと云ふと、村松の呑んだくれの肩を持ち居つて、怪しからぬ奴じや」お光「オホ、、、お父さんのマア……………何も肩を持つんじやないが、あたりまへのことだから、ねえ村松さま」

三太「さうとも、トントその通り」五郎「人に酒を呑ますのが何故あたりまへだ、馬鹿なことを申すな」三太「モウチャンとこれで話が纏まつて居る、サアお光さん準備をなさい」お光「アイ」五郎兵衛煙に捲かれて居る内に、三太夫はズーツと奥の室へ這入つて了ふ、お光はいそぐと酒の支度をする、五郎兵衛も仕方ないから

五郎「モウお前さんのやうな無茶者に掛つては堪らぬ」苦い顔して酒の座に着く、お光は嬉しさに三太夫に盃を献し、お光「サア村松さま、數多お飲んなさいましお酒はウンとありますから」五郎「コラ」光、餘計なことを云ふな、ソんなことを云ふて尻を据ゑられちやア堪らぬぞッ」お光「ナニ介意やア仕ないよ、酔ひ潰れなすつたら

妾が御介抱を申しますから」五郎「何を吐す」お光「ねえ村松さま、お酔ひなさい、酔つて管とやらをお巻きなさい」三太「イヤ有りがたい、左様來なくつちやアならないところだ、お光さんは拙者大すぎだ」お光「妾も貴君が大好きよ」

五郎「ヤイ」馬鹿なことを、親を前において、何と云ふこつた、阿呆奴」お光「オホ、、、マアお父さまのアノ恐い顔……………」三太「閻魔にせんぶりじや、ワハツ、、、」五郎「馬鹿にして居やアがる」五郎兵衛ブツ／＼怒つて居る、三太夫は夢中になつて、ガブ／＼煽り付ける、お光は思いありげに頻りに脩める、親の五郎兵衛は苦い顔して見て居る、その内に三太夫へべレケになつて」

三太「ゲエーブツ……………アツモウ酔つた、モウ飲けぬ、ゲエーブツ、トツ時に五郎兵衛さん……………」五郎「ソラ初め居つた、モウ宜いから歸つて呉れ、」三太「イヤ歸らぬ、拙者折入つて頼みがある」

五郎「大方夫れと分つて居る、モウ御免を蒙むりたい」三太「これは怪しからぬ、今云ふのは金ではないぞ、また酒を呑ませると云ふでもない、實は拙者のこの太刀、研いで貰ひたいのじや」五郎「刀を研げ、フォーム、こりやア可訝しい、浪人の呑んだくれ

に、何で刀を研ぐ要がある、刀は看板じゃないか」

三太「サア、看板じゃから奇麗にいたさぬではならぬのじや、今こそ呑んだくれの三太夫ではあるが、やがて主取いたしたならば、御家の三太夫となるつもりじや、武士の魂、刀が錆て居つては役に立たぬ、一番上等に研いで呉れ」

五郎「フ、ム、云ふことだけは一人前以上だから可訝しい、しかしマア理屈の分つたことだから、研いで上げやう 三太「研いで呉れるか、では此刀を渡さう」と刀をわたす お光「モシ村松さまが御出世をあそばしたら、妾ほんちに嬉しいわ、妾は村松さまの許へお嫁に行くのよ 三太「モシ今にも仕官のいたさば、お光さんは拙者の女房、のう五郎兵衛さん 五郎「知らんわい、ソんなことは……」

お光「さうだとほんちに嬉しいが……」とニツコリする、三太夫はナニ分に酔つぱらひ、一步は高く一步は低く、深川の浪宅さして歸つて了ふ……」

節「頃は元祿十五年、極月十四日の正午すぎ、三太夫は衣服も立派、見板すばかりの容態となり、ブラリと竹屋へ遣つてまゐられる……」

地「ヤア五郎兵衛どの、久しく逢はぬな」五郎兵衛、三太夫の風姿を見て、

五郎「ヤア、これはどうも、久しく御顔を見せなさらぬが、マア立派な御風姿で……」

三太「五郎兵衛喜んで呉れ、仕官いたしたぞ 五郎「エツ、ソんならいよ、御奉公をなさいましたので……」 三太「ウム、這度九州の去る御大家に召し抱へらるゝこと、相成り、明日主君のお伴をいたし、御入國をいたすことに相成つたのじや」

五郎「夫れはマア結構なことで、およろこび申しまする、ア、光々、一寸來い」

お光「アイ、お父さま、何でございます 五郎「コレを見る、三太夫さまは立派な御武家さまとならしやつたぞ、明日お國入をなさるのじや」

お光「マア……」お光はかねて惚れた男、仕官と聞いて嬉しさに、

お光「モシ村松さま、お目出度うございます」とはにかむ 三太「お光どの、喜んで下され、しかしお國入をいたすとあれば、まづ三ヶ年は江戸の土も踏まれぬと申すもの、今日は暇乞にまゐつたのでござる お光「夫れはお名残惜しうございます、妾もともく連れて行つて下さいまし 三太「出來ることなら連れ申したいが、仕官早々女を

引き連れると云ふこともなるまい、まづ今度の出府を待つて居られい」

お光「ハイ、ソンならかねてのお約束を……三太「決して無にはいたさぬ、今日ま

での御身の親切、遠く冥府から……お光「エツ 三太「イヤサ、遠き御國のことなれ

ば、再度の出府のその時まで……お光「キツとお待ち申して居ります 三太「時に五

郎兵衛どの、先般御依頼申せし刀の研は出来ましたかな」

五郎「ハイ、チェーンと出来て居ります」と取り出してわたす、三太夫ギラリと

抜けば……。

節「夏なほさむき氷の刃、ためつすがめつ打ち眺め……。

地「ウ、ムと莞爾 三太「能くも研いだり、これならば十と二十の人間を斬つたればと

て、よも刃のこぼれるがごときことはあるまい 五郎「エ、／＼、大丈夫、モウめつた

に刃のこぼれる氣づかひはございません、この五郎兵衛が一心凝つて研いだのでござ

いますから…… 三太「左様である、しかし一度試して見たいな」

五郎「遠慮に及びませぬ、お試しなさい 三太「幸い五郎兵衛の白髪首、覺悟ッ

五郎「めッ滅相な……五郎「ハ、ハ、ハ、嘘じや、然らば斯うして……」と三太

夫「狙い定めて掛けたる矢聲、エイッと打ち込む一刀は、竹屋の家の大黒柱、二寸

あまりもザツクリと、もの、見事に斬り込んだり……。

地「ヤア御見事々々々、立派なもの、能く斬れませうかな……。

三太「ウム、斬れ味はなか／＼宜い、有りがたい、これさへあれば大丈夫、百萬の敵

を得しより心丈夫、然らば五郎兵衛、代價は之れに拂つて置くぞ」バラリと出した小

判で五兩 五郎「これは何でございますな 三太「研賃じや」

五郎「滅相な、こんなものは要りませぬ、私は賃を貰はうと思ふて、研いだのではご

さいません、賃に働いたら、ソんな研ぎやうはいたしません、抑もその刀は、五郎兵衛熱血を注いで仕上げたもの、錢金で出来たのでございませぬ、金などは一文も要りませぬ 三太「夫れでは拙者困り入る、以前より一方ならぬ世話を受けて居る、今に立身出世のいたさば、キツと舊恩に報ゆることであるが、まづ此金は取つて呉れぬと甚だ困る…… お光「コレ……お父さま、そんなお金お貰い申しては不可ませぬぞ

五郎「ウム、何の貰ふものぞ、サツ三太夫さま、お前さまの御出世の首途、今日は私が御馳走をいたします、コレ光、支度をせぬか」

お光「アイ〜 三太「イヤ〜 夫れに及ばぬ、主君御出立の都合もあるから……」

五郎「イエ〜 どうでも今日は歸しはせぬ……」と無理に奥の室に押し込んで、親子が真誠の待遇をする…… 五郎「三太夫さま、五郎兵衛お願いがございます」

三太「何じやな 五郎「他ではござりませぬかね〜 光から聞いて居りますことが眞實なら、どうか女房に持つて遣つて下さいまし」

三太「エツ…… 五郎「お否でもありませんが、娘も執心、お前さまも、かね〜のお言葉に嘘言あらねば、どうか夫婦になつて下さい、五郎兵衛一生のたのみでござい

まする」と餘儀なき体……」

節「道理至極と思へども、明日をも待たず今宵の内、吉良の邸宅に命を捨つ、この世にあらぬ三太夫、よしやも命全うせしと、やがては上の掟により、死罪は免れぬ身であるに、どうもア夫婦約束が、なし得るものぞコレはマア、困つたことだと三太夫

地「ムツと詰まつた三太夫 三太「身うすきこの身をさほごまで思召下さる御寸志、三太夫まことに過分でございます、しかし國入とあればまづ三ヶ年は出府もならず、去りとて今光ごのを伴うことも如何なもの、今三ヶ年をお待ち下され、やがて江戸詰になりたる節、目出度く約婚をいたしたいと心得るが……」

五郎「イヤ御道理でございます、能く分りました、ソンなら三年待ちませう、が切めては夫婦の盃だけなりと、當席でお交し下されば、娘も安心いたすと云ふもの、これだけは是非御引承をねがひたい」とだん〜との話、三太夫は弱り切つた、夫婦の盃濟せし上は、モハヤ免れぬわが女房、死ぬるこの身に女房は不要ぬ」

三太「どうも困りましたな 五郎「夫れもならぬと云はれますのか……」

三太「…… 三太「アレ父さま、モウ仰しやつて下さいますな、一旦良夫と定めた三太夫さま、厭はるゝはみな妾が到らぬからでございます、モウ覺悟極のましてござい

まする……」

三太「覺悟極めては乙女子も、またなか〜に恐ろしく、かねて用意の懐刀、抜く手

も見せず我どわが、咽喉笛のぞんで突かうとする……

地「ヤレ待てしはしお光どのと、その手を執つて三太夫 三太「お光どの、早まるな、御身が眞心三太夫たしかに知つた、たとへ盃交さぬも、變らぬ夫婦のしるしはこれと、取つて渡した印籠は、これぞ竹屋の寶物となる」

三太「夫婦のかためはこの印籠拙者と心得、御主護下さい」

お光「アイ、ナンならこれをお紀念に…… 三太「三ヶ年は夢の間じや、身をつし、父御に孝養盡されい お光「アイ、楽しく御出府を待つて居ります」

三太「然らばモハやお暇いたす」と起ち上る……

節「お名残惜しやと見送る親子、これがこの世の永訣かと、思へばいとい後がみ、引かる、思いの三太夫、去らばくも口の中、編笠を負深に馳け出す……」

地「夜が明けると極月の十五日、残んの雪に江戸町々は銀世界竹屋五郎兵衛、昨日の三太夫の様子が如何にも可訝しい、何としても腑に落ちぬので、娘の光と差し向ひ」

五郎「お光 お光「ハイ 五郎「お前何と思ふか知らぬが、私は彼の三太夫の様子がどう

も可訝しいやうに思ふのじやが、ことに寄ると仕官と云ふのは嘘かも知れぬ」

お光「何のソンのことがありますが、妾にお紀念まで下されたものを、御武家さまが何で嘘をお吐きなさいませう 五郎「イヤ夫れでもどうやら俺は嘘のやうに思ふ……」

お光「ソンのことはありませんと云つてる」ところへ、表がたゝならぬさわざ、往來がワツ／＼駈け出して行く人で大混雑……ハテ何だらうと竹屋五郎兵衛、表へ飛び出すと ○「チイ兄弟何處へ行くんだ △「大變な騒動があつたよ」

○「どうしたのだ △「昨夜、本町松坂町に、すばらしい敵討があつたのよ ○「ハエー誰が敵討をしたのだえ △「去年斷絶た、淺野様の御家來が五十人ばかり、乗り込んで吉良様の首を切つて、夫れを鎗の尖へ貫ひて、今芝泉岳寺へ引きあげるの、血だらけで勇ましいもんだと、往つて見ねへか、俺もこれから飛んで行つて見やうと思ふんだ ○「豪氣なもんだな、素願しいことを遣つたな、往つて見やう……」と駈け出すこいつを聞くと五郎兵衛、夢中に飛び出し、突然その男の胸倉を取つてグイ／＼「○「アツ死ぬ」 五郎「さては三太夫さま分つた、黒二羽重の立派なかまへ、仕官し

だから暇乞とは可訝しいと思つた、また娘どの盃を否がつたも、これでスツカリ様子
子が分つた、さうとは知らず無理強いた、引き止めたのが濟まなかつた、思へば柱へ
一刀斬り付けたも、昨夜の働きの下稽古であつたのじや、ア、流石は淺野さまの御家
來、村松さまだけあつて、事を明さず夫れとなく、暇乞に來られたのは、身うすいこ
の身且はまた、お光の將來を思はれて……ア、豪い、豪い、死にます苦しい
私は死にます、どうぞ御勘辨を願いますく、五郎「ヲウ、汝のやうな奴に用はない、
バツ馬鹿者奴ツ」ポカリ横面をぶん打る。○「アツ痛いツ」その男こそ災難、よろめく
途端に足を踏みはづし、溝の中へ落ちこちて了ふ。○「ウワーツ」と云ふのを見返りもせ
ぬ竹屋五郎兵衛……。

節「狂氣のごとく駆け出す竹屋、向ふに見ゆる讀賣番附……」
地「エー、番附々々、讀賣番附……」エーこれは赤穂浪人の名前づけ、苗字から知行

年まで、くわしく認めて、代價はたつた十六文……。

五郎「番附屋……」男「へエー、屹驚いたしました。五郎「宜いところへ來た、サア番

附を出せ 男「お買い下さいまするか 五郎「氣に入つたら千枚でも一萬枚でも、一人で
俺が買つて遣る、その代り氣に入らなかつたら、ボン打つて溝へ打ち込みから左様思
へツ 男「大變なさわぎだ、どうぞ御覽下さい 五郎「何故このやうに薄くしておく、ト
ンと解らぬぞツ 男「取り急ぎましたから、版が判然いたしません」

五郎「困るじやないか、待て、ヤツコリヤ番附屋、コリヤ左文字じやないか」

番「へエー、そりやアお前さん、裏でさア 五郎「ヲウ、ごうりで文字が左になつて居
る……」 五郎「兵衛よほど忙して、居る、ズーツと讀み下すと 五郎「何々城代家老大石
内藏助良雄、ウム、さては大石さまが頭領だな、村松さまも淺野の御家來、お居でな
さらねばならぬ筈じや、ウム 男「どうぞお買い下さいます番附は時が遅れますと損を
いたします、早くお買い下さいます 五郎「エツ、八かましく吐すな、何々、裏門の大
將としては、大石主税良金、ウム、夫れが副將としては、郡代の吉田忠左衛門、甘い
な、甘く合したな、何でも内藏助と云ふ仁は、山鹿先生の流れを汲み、何でも山鹿流
をもつて討ち入られたと云ふことじやが、何しろ豪い」

男「どうもこれは仕様がありませんな、早く仕て下さい 五郎「八釜しいわい、何々片岡源五右衛門、この仁は淺野様御切腹の際、御暇乞をせられた、御小姓頭だ、なア豪い、次には小野寺十内、岡島八十右衛門、千馬三郎兵衛、堀部彌兵衛金丸、ウムよく揃つたな、ウム、次は堀部安兵衛武庸、ウム、この仁がまた豪い、一代に三度まで仇敵討をしたと云ふ、武士のかいみじや、豪い 男「これは仕様がありませんな、日が暮れて了います 五郎「介意はぬ 男「お前さんは介意ひませんが、此方が介意ひます…… 五郎「エツ、八釜しく吐すと、拊り殺すぞ、エ、磯貝十郎左衛門に間十次郎、勝田新左衛門に神崎與五郎、武林雄七、大高源吾、ウム、村松三太夫ヤツ、豪い三太夫、村松三太夫豪いぞツ」と叫ぶや否や、番附屋の手から番附を、残らず我が手に奪ひ取り、物をも云はず竹屋の老爺さん、スタコラ〜駆け出す…… 地「呆氣に取られた番附屋 男「ヤ、番附盗賊……」すると一人の女房さんが、女「番附屋さんどうしたの…… 男「へエー、どうも酷い仁で、一体彼の仁は何でございます 女「あれかへ、彼れは横町の研屋竹屋五郎兵衛さんじやが、今も往來の人を

ぶン殴つて溝へ投げ込んだ、どうか仕てるのですよ 男「へエー左様でございますか」 女「どうしたのだへ 男「へエー、番附をスツカリ取られて了びました」 女「夫れはマア可愛相に、早く竹屋へ行きなさい 男「へエ、有りがたうぞんじますと、番附屋はドン〜駆け出す…… 節「番附取つた五郎兵衛は、ドン〜駆け出し、自宅へグワラリと飛び込んで…… 地「ヤア娘、光、光、娘は居ぬか、エツ、娘じや、五郎兵衛は居ぬか、早く来い〜 女「お光「お父さま、光は妾で…… 五郎「慌てるな」 女「お光「お前さまこそ慌て、居らつしやいます 五郎「喜べお光、三太夫さまは日本一の武士だぞ 女「夫れがどうかいたしましたか 五郎「どうの斯うのじやない、昨夜大石内藏助様をはじめとし、赤穂の御浪士五十人あまり、本所松坂町の吉良様を討ち取り今泉岳寺へ引き揚げるところだ、三太夫さまもその御同勢の一人じや 女「お光「エツ、ソナなら三太夫さまが仇敵討をなさいまして、アノ泉岳寺へお引き揚げ…… 五郎「ウム、素頼しいもんだ 女「お光「コツ、コリヤ斯うしては居られぬ、たゞ一目お目

にかゝつて、云いたいことがある』と尻を裏げてバラリと表へ駈け出す、
五郎「ウム、己も云いたいことがある、ソレッツ」とこれまた駈け出す、ところへ番付
屋が駈け込んで 男「ドッコイ遣らぬ番付盗賊 五郎「エツ、何を仕やアがる」と突き退
け刎ね退け……駈け出す……」

節「いよ／＼これから泉岳寺、枕交さぬ女房のお光、一生の別れをいたされる、哀れ
な暮はこれからなれど、あまり永いで一寸一息……」

◎南部阪雪の別れ 附寺坂吉右衛門注進の段

節「アラ樂し、思ひは晴る、身は捨つる、浮世の月に、かくる雲なし……」

地「鐵のやうな堅い心の赤穂の浪人、大石内藏助良雄をはじめとして四十と六人、艱
難辛苦も度かさなり、神崎與五郎、大高源吾以下の苦心により、いよ／＼敵上野介
義央は、十四日の夜は自己が好める茶會あり、在宿に極まつたり、日頃の思いを遂げ
るは、いよ／＼十四日と極まつた、されば今夜をかぎりこの世の思ひ出りで、心ばか

の永譯を告げよと、同士は四十と六人に、假の暇をわたされた内藏助、今生の思出、
御後室に御暇乞をなさんものと、折しも降り来る雪の中、ぶらりと石町の隠れ家を立
ち出でられる……目指すところは、云はずと知れた南部阪、淺野式部少輔殿のお邸
宅……」

節「納戸更紗の長合羽、爪かけなしたる高下駄、ザクリと踏めば雪の跡、二と二と合
せ四での道、今夜かぎりの壽命かと、思ひはちいに内藏助、澁蛇の目がささし騷し、
南部阪は式部少輔殿の、御邸宅へどこぞ辿り着く、

地「門をズーツと這入つて 内藏「お頼み申す 門番「何誰でござる 内藏「大石内藏助良
雄、御後室瑤泉院さまにお目通りがいたし度く、まかり出でましてござりまする」

門番「しばらくお控へを願います 女「一人出てまわり 女「此方へお通りを願ひます
内藏「左様な……」とズーツと來ると、新に出來た御殿の女關

女「これよりお上り下さいまし、合羽を脱ぎ傘をしばめズーツと伴待室へ打ち通る」
△「コレは、御太夫さま、久しく御目にかゝりませぬ……」と挨拶するのは、小

野寺十内の妹で戸田の局。女内「オツこれは戸田の局。何日も御健固でまづは目出度い。戸田「太夫さまにも御健勝で、お喜びを申し上げます……シテ今日は……」

内蔵「久しく御目通りもいたさず御起居お尋ね申し上げたためにまゐつた、よろしくお取り次を願ふ……」

戸田「ハッ、御後室さまにもお待ちかね、今日、内蔵助がまいるか、明日は訪ね呉れるかと、日毎にお噂をあそばしてござりまする」

内蔵「夫れは勿体ない、ごうか取次で呉れるやう。戸田「ハイ……」

局は御臺の前へ

戸田「御後室さま、内蔵助さまがお見えになりましたとござりまする」

後室「ナニツ、内蔵助がまゐつたと、夫れはく待ちかねた、早々こへ通して呉れまするやう」

節「白の綸子のお召もの、紫更紗の十徳に、珠數つま操つた御後室、良夫に捧れる房なす髪、切つて貞操を立て通す、年はやうく二十歳に足らぬ、この世の危の十九歳梅の上に御端座ある、水の垂るやうな美しさ……」

地「戸田の局の案内によつて、内蔵助は後室の御前へと平伏する」

後室「オツ内蔵助、能う見えましたのう。内蔵「これはく御後室さまには、毎時に變らぬ爾はしき御尊顔を拜し、内蔵助如何ばかりか恐悦至極に存じ奉りまする」

後室「オツ、其方も健固、重疊々々久しく顔を見せなかつたが、如何いたされましたな。内蔵「ハッ、相變はらず、馬鹿な遊びに日をすごして居りまする」

後室「何ツ、馬鹿の遊びとは……」

内蔵「拙者徒然に、近來茶事に心を寄せまして、熱心稽古をいたし居ります。後室「左様か……」

夫れは結構……」

とは云はれない、後室は妙な顔を仕てござる、内蔵助は四邊に心を配つて居る、後室は夫れに目を付け

後室「コリヤ戸田。戸田「ハイ。後室「ひさくじや、内蔵助に酒まゐらせい、妾も蓋すごしたい。戸田「ハッ」直ぐにお酒が出る、御馳走も出る……」

内蔵「イヤこれはごうも御後室さま、恐れ入ります、お手づからの御酌はあまりに恐れ多い、ア、ごうぞお捨て置きを願いまする、ごうも寒いときには、斯うした熱い燗を煽るのが第一でござりまする」

チビく、チョツと舌打ち、

内蔵「ア、これはなかく結構な御酒、ひさくじのことでよほごまゐりました、エ、

酒は上酒にかぎりません、ナニ灘の一筋と仰せられますか、ごうも宜いと思ひました、拙者も主君御在世中は、いろく贅を遣りまして、よい御酒も頂きましたが、今は浪人の身にその日の生活にも逐はれ、ごぶろくで押して居るやうなことで……ア、能い心持になつてまゐりました、ゲーブーツ、ア、好い心地でござりまする……と一人で悦に入つて居る……。

節「側目も觸らず御後室、内藏助に目を付けて、その心意氣を讀まうとなさる、讀ましはせじと内藏助、油断はならじ壁に耳あるぞと云へばこの御殿、如何なる敵の間諜有らうも知れぬ恐ろしや、今宵に迫つた仇討を、見破られては一大事、無禮は平にお許しあれ、許させたまへも口の中、グツと膝をば崩されて……。

内藏「ゲーブツ、エ、さて御後室さま、拙者今日まゐりましたは、御暇乞のためでございます 後室「ナニ暇乞とは……何れへまゐる 内藏「イエ何處へもまゐりはいたしませぬ、これから京都へ歸るのでございます 後室「何、京都へ歸るツ」

内藏「ハツ、御承知の通り、拙者江戸へ出でましたのは、亡君御三回忌の御佛事御取

越のためでござりまして、夫れは先ごろ滞りなく相済み、モハヤ江戸には用なきこととでございますから、いよく明日江戸出立歸國たいと心得まする」

後室「ソレならモウ京都へ歸ると云やるのかツ 内藏「左様でございます、これが路程の十里や二十里のところでございますれば、また度々出府もいたされますが、假にも百里の上を越した京都の空、またの出府のほごも覺束なうござりますから、これがお別れと心得まして、お暇乞に上りましたやうなことで……御後室さまには随分と御身いとはせられ、御長命をあそばしまするやう……。

後室「ソンなら内藏助、お前は故主君さまの御鬱憤も晴させ申さずにアノ京都へ歸ると云やるのか 内藏「コレはまた異なることを承はりまする、主君の御鬱憤とは何事とござりまする…… 後室「ソツ其方忠義と云ふことを忘りやつたか 主君の御仇上野介を…… 内藏「アツコレ後室さま、めつたなことを仰しやいまするな、壁にも耳あり、モシカそんなことが世間へ知れましては、御身さまの煩いとなりまするぞ、また忠義の心を忘れたかとの仰せ、まことに恐れ入ります、内藏助は忠義を知つたればこ

そ、京都へ歸るので……京都へ歸るのは忠義の一つでございます……。

後室「ナニツ、京都へ歸るのが何故忠義じや、忠義と云ふのは主君の仇、上野介の首

級を上げ、主君の御墓前に捧げるのが……タツ白痴けたことを仰しやるなツ」

内藏「イヤこれはお叱り恐れ入ります、成るほど夫れも一應は道理のやうに聞えます

るが、夫れでは生命が亡くなります、大切な生命が亡くなりましたしては、忠義も何も

臺なしでございます、後室「エツこの内藏助、氣はし狂つたか、内藏「イヤ決して狂ひは

いたしません、拙者は能く忠義の道を考へました、世に死ぬことを忠義と云いますが

あれは大きな間違でございますして、誠實の忠義と云ふものは、生きて盡すのが真髓で

ございます、この故に手前は生きて明日江戸を出立、京都へ歸ると、この大小刀を捨

てまして、町人となります、後室「エツ、内藏「町人となつて、茶商をいたします、その

爲めにこの頃は茶の稽古をいたし置きましたは、全くこれためでございます、また

座して食へば山も空しと申します、マシテ身うすい内藏助、親子……コウツト……

と指を折つて、内藏「六人の口が遊んで居つては、口が乾上つて了ひます、よつて茶商

を営みまして、側ら主君の御墓にお仕へ申す、これ一舉兩得と申す、宜しきところの忠義でございます」と、

節「心にもなき虚言を、云ふも世間を憚かる手前、深きたくみであらうとは、知らぬ後室目に角立て、

地「今まではモウ頼みに頼み切つたる内藏助と思ひしは目辟で、斯んなに心の腐つた武士とは知らなんだ、ア、モウこの世に頼みの綱も切れたるかど、流石氣丈の瑤泉

院さまも、思はずハツと氣を取りのぼせ、内藏「コリヤ内藏助、さても汝は情ない心になつて呉れたの……抑も赤穂の城わたり、國許を跡に山科の住居、妻や小供を國へ

と歸し、月雪花を友として、過すはこれぞ世を欺き、敵を詐る深慮と、ふかくも思いをいたせしに、町人となつて主君に忠義を盡さんとは何事である、コリヤ内藏助、主

君が殿中に吉良を打ち洩したまひ、田村の邸宅に御切腹、血糊の付着たる九寸五分、無念なるぞも御胸の中、過ぎ去りしたまひし御心を、思ひ出せば……コリヤ内藏助

妾はこの胸が、ハツ張り裂けるやうな……」と、

節「思はずツツと御後室、さても御道理ごもつとも、今この胸を割つて見せ、御安堵させたく思へども、壁に耳ある世のたごへ、明日ともならば御胸の、晴れさせたまふこともある、許させたまへも口の中……」

地「内藏助は後室の心を推し量り、腕も痺る、切なさ辛さ、思はずツツと差し俯向く後室「コリヤヤイ内藏助、その折の主君の御無念、ソツ汝やア何とも思はぬか、下人と同じ庭の上、憤死したまいし御無念を、汝やア何とも思はぬか……ツ」と聲を限りに侮耻しめる……」

節「主君思ふ貞操に堅き瑤泉院、心はやみを辿るがやう……」

地「後室はキツと内藏助を睨め付ける、眼からはハラ／＼王の雫が垂れて居る……」

内藏「ハ、ハ、ハ、コレはハヤ御後室さまのお怒りを買ひ、恐れ入ります、成るほどその當座こそ、悪い上野、恨めしの義央、己れ、今に恨を晴して遣らうと、サア、思ひに凝つたこともありましたが、考へると、これは大きな無理、決して上野介ごのを恨むことはないと思ひました 後室「何、何ッ 内藏「能く御考へあそばしませ、故主

君が上野介を斬りたまひしは、これは一時のお怒り、云はゞ私事でございます、主君は勅使御饗應使たる、お大切なる御役目に在られたのでござります、また殿中にて鯉口三寸寛げなば、御家は断絶、其の身は切腹と云ふことは、コリヤ神君よりの動かぬお掟でございます、主君は夫れを御承知でありながら、御殿松の御廊下において、私憤のために、公の御役目を忘れたまい、上野介ごのに斬り付けたまふ、コレまことに上を恐れぬ御大膽な成され方でございまして、主君に重々のお落度あり、夫れゆへ今日吾々まで、斯く路途に迷ふことに相成つたのでござります、されば今上野ごのを恨みまするは、大きな間違でございます、拙者などは望初から、仇討など、左様な大膽なことは、夢にも思ふては居りませぬ、そこでござります後室さま、表から仇討は出来ぬとしては、これ主君に對して大なる不忠でござります、よつて拙者はこれより町人と相成り、亡き主君の御冥福を祈り、且上野介ごの御病死あり、拙者も病死をいたし、さて冥途にて主君に、上野介を討ち取りましたと、申し上げたいと思ひます、モウ夫れより外に分別はござりませぬ……」

「筒」鎗や刀をカタリと捨て、平の町人となりますのも、これみな主君への忠義ぞと眞面目に云へど心の苦しき、

地「後室はブル／＼身を頼はされ 後室「ヤア、心の腐つた内藏助、今日まで誑られたが口惜しい、チエツ、言葉交すも汚らばしい、サツ、退りや／＼、エツ退り居れいッどキツとなる 内藏「イヤこれはいよくもつて御立腹、恐れ入ります、拙者の心をお誤解れては、甚だ迷惑いたしまする 後室「エツ、まだ申し居るか、目通り叶はぬ、退り居れいッ 内藏「然らばモハヤお暇を申し上げます」

後室「ヤア／＼戸田、内藏助を引き出し召されい、顔を見るのも腹が立つッ」

戸田「内藏助さま、お起ちあそばしませ 内藏「ハッ、ごうもハヤ飛んだ御立腹を蒙り、まことに恐れ入ります、然らば御暇申しまする」と玄關口へ立ち出でる、

戸田「太夫さま、御身さまはごうしたものでござります、如何にお隠しあそばすとて後室さまの彼の御立腹、何故御本心をお明しにはなりませんぬ」

内藏「エツ 戸田「妾も小野寺十内の妹、御身さまの御本心は能く存じて居ります、ご

うぞ妾までお明しを願いまする 内藏「ハ、ハ、これはまた戸田が妙なことを申す、内藏助は舌は二枚は持たぬ、本心は今御前で申したでないか、明日出立、京都に歸つて茶商をするのじや、夫れに違ひないのじや」

戸田「ソソならごうでも 内藏「ごうも斯うもない、夫れが全くじやからいたし方がないわ、またいづれ十内どのにも逢へるから、言傳があるなら、傳へて遣るぞ」

戸田「ハイ、有りがたうぞんじます、兄からは何の音信もいたしませぬが、何をいたして居ります 内藏「十内も拙者と同じ心、今は武士を止めて飴賣をいたして居る」

戸田「ナニツ、飴賣を…… 内藏「左様、彼はなか／＼年は老つて居るが、器用な男で、今はなか／＼能く賣れる、飴い／＼と日々京都の町を歩行いて居る、なか／＼感心な男である 戸田「ナツ何が感心、あだ汚らしい、武士を止めて飴賣とは情けない、モシ太夫さま、戸田が左様申したと傳へて下さいまし、左様して耻辱を辰舞ふより、腹を切つて死んで了へッ…… 内藏「イヤ心得た、キツと申し傳へることである、しかし戸田どの、モハヤ近々に出府もなりかねます、また故主君七回忌には、出府い

たさうも圖られぬが、まづ夫れまではお暇申す、御身も強健に、後室にお仕へなされ
い 戸田「ハイ 内藏」夫れからこれなる風呂敷、中には徒然のをりふし、認め置いた歌
發句、書き遺してありますから、後室さまへ披露申して呉れますやう」

戸田「ハイ、宜しうございます 内藏」併し今はなか／＼御立腹の矢先じやによつて、
御取上にもなるまい、よつて御機嫌の直りし時を圖つて、差し上げて呉れますやう

戸田「ハイ／＼宜しうございます 内藏」然らば御暇いたすから……」と合羽被つ
て玄關口、足駄を突ツかけ立ち出でる、戸田の局は門まで、見送られて」

戸田「お静かにお歸りあそばしませ 内藏」ハイ……」とそのまゝ門の外……」
鶯啼く蟬よりもなかく／＼に、鳴かぬ螢の胸の火は、いよ／＼燃え出で焼け付く思ひ

許させたまへ御後室……」

地「如何に忠義と云いながら、罪ふかくも女儀をだまし、心にもなき虚言に、その身
の工を知らざじと、苦しい思ひなかく／＼に、熱湯を呑む心地ぞする……」

内藏「モシ御後室さま、まことに申しわけのないことでございます、心にもなき虚言

かまへ、要らぬ御立腹をいたさせ、臣として何ともハヤ申しわけのない仕宜、これも
つまりは油断大敵、千丈の堤も蟻の一穴より壊れるとか申し、決して油断がならぬの
でございます、いづれは明日ともなれば、御分りになりませうから、今の無禮は何卒
お許し下さいますやう……」と心の中に佗言、そのまゝ石町へと歸つて了ふ……
跡に後室無念さに、顔も得上げず咽び泣き、戸田の局が勞りて、御部屋へ伴ひいろい
ろど、御慰めてぞ居られたが……」

地「さて翌る朝になると、俄かに門前さわがしく「御注進々々々」と云ふ聲がひびき
わたる、聲に驚く戸田の局、玄關口へと立ち出で、」

戸田「騒がしき何事であるぞ 男」ハツ、下僕は太石内藏助より命を受け、御當家御後
室さまに、昨夜の次第を御注進申し上げため……」

戸田「何昨夜の次第とは…… 男」我々同士四十と七人、明夜本所松阪町、吉良邸へ
討ち入り、首尾克く上野介の首級を上げ、只今芝泉岳寺へ引き揚ぐる道途にござりま
する 戸田「エツ、サツさては太夫さまをはじめとし……ウム、そゝそは一大事……」

「バタ／＼で後室へ申し上げると、後室「ア、知らなんだ、左様云ふ心とつゆ知らず、噛んで吐き出す罵りやう、アツ、さぞや内藏助が恨めしう思ふであらう、コレ内藏助、許したも、到らぬ妾は……アツ、許したも、ハツ耻かしい」と身を
もたへ、嬉しさと悲しさが混合になつて「ウワツ、ワツ」と泣き出されたのは、他處
の見る目も哀れなり、

「男は誰ぞと見てあれば、これぞ寺阪吉右衛門、御臺に注進なせし後、廣島表に在
します、大學どの、御許と、但馬の國は豊岡なる、石束源五兵衛方に居られる、女房
や子供に注進の、役目を受けて遣つて来る……」

地「直ぐにお庭前へ廻されて、討入の模様をお聞になる、吉右衛門は委しく語る……
後室「シテ討入の人数と云ふは、吉左「ハツ、討入ましたる人数と云つば、まづ第一に

- 大石 内藏助良雄
- 大石 主税良金
- 吉田 忠左衛門兼亮
- 原惣 右衛門之辰
- 片岡 源五衛門高房
- 間瀬 久太夫正明
- 間瀬 孫九郎正辰
- 小野 寺十内秀和
- 小野 寺幸右衛門秀富

- 間喜 兵衛光延
- 間 十次郎光興
- 間 新六光國
- 磯貝十郎左衛門正久
- 堀部 彌兵衛金丸
- 堀部 安兵衛武庸
- 近松 勘六行重
- 富森 助右衛門正因
- 潮田 又之丞高教
- 早水 藤左衛門滿堯
- 赤垣 源藏重賢
- 奥田 孫太夫重盛
- 奥田 貞右衛門行高
- 大石 瀨左衛門信清
- 中村 勘助正辰
- 菅谷 半之丞政利
- 千馬 一郎兵衛光忠
- 森岡 右衛門貞行
- 岡野 金右衛門包秀
- 不破 數右衛門正種
- 大高 源吾忠雄
- 貝賀 彌左衛門友信
- 村松 喜兵衛秀直
- 村松 三太夫高直
- 岡島八十右衛門常樹
- 杉野 十平次治房
- 吉田 源右衛門兼貞
- 矢田五郎右衛門助武
- 勝田 新左衛門武堯
- 武林 唯七隆重
- 倉橋 傳助武常
- 前原 伊助宗房
- 矢頭 右衛門七教兼
- 茅野 和助常成
- 横川 勘平宗利
- 神崎 與五郎則休
- 三村治郎右衛門包常
- 寺阪 吉右衛門信行

の、四十七人でござります。後室「ウム 吉右」まづ四十七人を二組と別けられ、表門には大將内藏助良雄さま、二十四人を引き連れてお進み、さてまた裏門に向はれましたは、御子息主税良金どの、差添として吉田忠左衛門さま向はれて、表裏兩門一時に打ち破り、降り積む雪を事ともせず、ドツとばかりに討ち入りました。

節「さてその日の扮装は、地黒の袴天山道だんだら筋、白き木綿の袖じるし、襟に下げたる短冊には、播州赤穂の浪士、何の某と書き記し、白山足袋に茗荷草鞋を踏み占めた、みな一樣の御扮装、法正流の鍔頭巾、投げ鎌投げ槍繩梯子、半弓薙刀太刀、自慢で掛ける大掛矢、小田宮流の投げ松明、威武堂々と押し入つたり……。」

地「中の一際目立つ大將大石内藏助、その夜の扮装見てあれば、腹巻仕立の着込みに淺黄羽二重の小袖、丸の中に鷹の羽の定紋は主君より拜領、錦襦の具足袴に天鷲絨の笹縁取つたる野ばかま、大刀は浪の平行安、小刀は肥前の忠吉、黒らしやの陣羽織、御紋は二ツ巴と知られたり、猪首に着なし、襟に下げたる短冊は、赤穂の浪士大石内藏助良雄四十餘歳と記し、月に輝く星かぶと、六十四枚金切割の采配は、漢の後體に

收め、山鹿流の陣太鼓は山鹿素行先生の御仕込、一二三流れの打込みは、五個十二陰陽の切返し、山と河との合言葉、女小供に目を掛けた、逃げるを退うな向ふは打てどはげしき下知を傳へしは、

節「實に忠臣のかゝみぞと、今に湛へし義士の統領……。」
地「そのまじさは口ではトテも云はれませんが、アツ苦しや」と吉右衛門、どうぞお茶を一服と云ふ、ついでに寅者も一寸一服……。」

演者白す、こゝに長編講談として『義士銘々傳』を講演することにしたしましたが抑もこの銘々傳は、從來有り来り……講談社會に演じ来りたるものは、全くその趣向をかへまして、本演者および速記者同伴にて親しく東京は品川泉岳寺より播州赤穂の華岳寺へまいり、御寶物から年代記その他義士のかくれたる烈傳を聞き得、これを講演いたしたものでありまして、すべてを寶傳に取り、曾て世に流布されてゐないものが幾段もあります、これは演者のひそかに自負するところでありまして

亦世の愛讀者にもお耳新らしいものと信じて居ります、言々句々、皆な血と涙の結晶でありまして一讀儒夫を起たしめ、有情男兒をして暗涙に咽ばしめ、又非快なるところに至りては、思はず快哉を叫ばしめる、まことに義士銘々傳としては蓋し理想に近いものと信じて居ります、乞ふ愛讀を賜へ。

義士銘々傳 終

大正六年二月二十四日印刷
大正六年二月二十八日發行

【定價金參拾錢】



講演者 春風亭露玉
發行者 立川熊次郎
印刷者 山田千之丞

發行元

大阪東區博勞町四丁目
書籍出版業 立川文明堂

電話南三〇九四番
振替大阪二四六一番

209
1557

終

